

e-Bookland

想定外の成りゆき

～時を経てからの、それぞれ～

倉田周平

誘拐犯は元競馬騎手
狙ったお嬢様は天然娘
酒場のママの悲しい過去…

行き当たりバッタリの
身代金目的誘拐の顛末は？

想定外の成りゆき

（時を経てからのそれぞれ）

倉田周平

もくじ

第一章	誘拐、潜伏、身代金	4
第二章	身代金要求・その後に：	45
第三章	意外な強奪プラン	75
第四章	マル対の動向	104
第五章	想定外の成りゆき・年を経て	126
あとがき		132

第一章 誘拐、潜伏、身代金

人通りのない寂しい河川敷の片隅に、目立たぬようにポツンと停止している、軽のワンボックス。夜間は人通りがブツツリと途絶え、明りも対岸のネオンと、橋梁を照らす無数のオレンジ光だけしか、届いて来ない。

そんな中、その怪しげなモスグリンのワンボックスの中から、わずかに呻き声が漏れ出て来る。そして重なるように、男の影が、見えた。両眼をガムテープで目隠しされたサルグツワの女を、後ろ手に縛り、鋭いナイフで脅しているのだ。頬に触れるナイフの無機質な冷たさに耐えきれず、悲痛な呻きをあげている女を、男は一方的に、そのナイフを武器に、車内後部のスペースで、寝袋の中に入れて、脅迫している。

いくら郊外の河川敷でヒト気がないとは言っても、警察の巡回や夜釣りのボートが、いつ近づいて来るとも限らない。男は焦っていた。嫌がる女を無理矢理、袋に押し込もうとする。それに抵抗する、女。仕方なく、男は、女の細い首の後方に、スパナで打撃を加えた。グツタリと失神する、女。そして、ようやく静かになったと、男は手際よく女を片づけようとするが、再び女が正気に戻り、抵抗を始めた。男の股間に偶然のタイミングで、ケリが一発入る。男はヒルんだものの、それと同時に、怒りも倍加した。男の正拳突きが女のミゾオチに命中して、精一杯の抵抗

に、とどめを刺した。グツタリとした女の身体は、スツポリと寝袋に納められ、その寝袋の上から、グルグルとイモ虫のように荷造り用の細紐で、縛り上げられた……。

男は小柄ではあるが、力のある筋肉質だった。一見、労務者風の浅黒い中年。しかし、体力はありそうで、二の腕にも、鍛練の筋肉跡が見受けられる。それに引き換え、女は二十歳前後、細身の学生風で、どう考えても、カッパルの男女とは程遠い隔たりである。どんなトラブルがあつたのか、男は、機械的に寝袋の女をワンボックスの後部に押し倒した後、一部を切り取って加工したダンボール箱で上から隠し、淡々と運転を始めた。誰が見てもそれは、普通のドライブとは相当かけ離れた、事件のキナ臭さがプンプンと漂う運搬、であつた。

*

*

その車が行き着いたのは、下町の古びた商店街の脇に、ポツンと小さく不景気な看板を掲げた、スナツクの裏手だった。ちょうど、一台、車が止められるだけの目立たぬ砂利敷きのスペースを、そのワンボックスが無理矢理占領した。男は実に手際よく、寝袋の女を肩に担ぎ出し、そのまま店の裏口から入って行った。建物の裏手隅であり人目に付かぬ、用意周到なエアポケットだった。鍵は、自分のポケットから取り出して、ドアに差し込んだ。この店と、何らかの関わりがある男だということが、自ずと解る。しかし、男は、侵入の際、当初はドアを押して入ろうとして、やや手間取った。そのドアは、普通一般に備えられている引き戸なのに、である。外側に引いて開ける扉を、男は間違えて外から押し込もうとして、開かずにイラついたのだ。つまり、

何らかの関係があるのは間違いないのだが、その古びた店「スナック・洋子」の住人ではないと、容易に推測出来た。

*

*

「珍しいわね、あんたが顔見せなんて」

利山洋子は、村野裕行が女を寢袋から引き出すのを横から冷ややかに眺めつつ、そう言い放った。深夜十一時過ぎで、洋子はすでに、店の二階にある住居部分の寢室で、就寝準備に取りかかっていた。その日、木曜日の晩は休業日だ、というのが、洋子の早寝の言い訳だ。だから、普段なら店に出ている夜の時間帯にもかかわらず、その晩はすでに、二階に上がっていたのだという。……なのに、突然やって来た村野を無下に追い出そうとはしない様子から、洋子がすでに、村野と過去、やはり何らかの浅からぬ関係にあったフシが、読み取れる。

「あんた、そんな風に、女を粗末にするモンじゃないよ、まったく」

寢袋から引き摺り出された銭山智美は、サルグツワの下でヒイヒイ声を上げていたが、それも同性の洋子の声を耳にしてからは、やや収まって来た。恐怖の中に、か細いけれども光明を見出した、という心境なのか。

「あんた、この鍵、どうして持ってるのよ。渡した覚えはないけれど？」

「テメエが、スペアキーを、汚ねえ鉢植えの下に隠すってワンパターンぐらい、俺だつて忘りやしねえ」

この日の犯行計画を練る段階で、すでに村野裕行は、利山洋子の店のスペア鍵を、鉢植えから盗み出して確保していたのだった。このあたりは、ある意味、きちんと計画だてていたフシが洋子にはうかがえた。

「そうか。それで、か。鍵のスペアがいつの間にか、なくなっちゃってたって。……つたく。ドロボー」

「ウルセエ！」

ウルセエ、という、その村野の太い叫びは、かなりの声量だった。しかし相手の洋子はと言えば、さほど驚いたりおどけたりはしていない。普段のつき合いの上でも、言い争いが、それほど珍しくもない間柄ではあったのだろう。どちらかと言えば、サルグツワをかまされている山智美の方が、当然のことながら、余程ビクビクとおどけづいている。

「鍵を返して。もう、あんたと私は、何の関係もないんだから」

洋子の主張に対して、村野は無下に否定は、しなかった。そして、昔、それなりの縁があつた二人なのだということは、そばにいた智美にも、眼には直接触れてはいないものの、容易に推測出来た。

「とにかく、休ませろ」

仕様がないうという表情を示しながら、洋子は煙草を口に運びつつ、智美の目隠しとサルグツワの姿を、改めてマジマジと眺めた。

「あんだねえ」

村野はすでに、一階、店の奥の狭い居間で身体を横にしながら、洋子に用意させたビールを口に運んでいる。

「何なのよ、この変態女は」

洋子が意外にも自分のことを変態呼ばわりしているのを聞き、銭山智美は、何よ、それはないじゃないと、違和感を覚えて、身体を動かした。

「バカヤロウ。見れば、解るだろう」

「あんだねえ、そういうサルグツツとか、目隠しとか、変な趣味は、隠れておやりなさいよ、隠れて」

智美の意に反して、洋子は明らかに、誤解している様子だった。

「縛られる方も問題あり、よ。恥ずかしくはないのかい。平気でこんな男の言うなりになっさ。何がいいのよ、こんなプレー」

プ、プレーと聞いて、銭山智美は、必死になって、何度も何度も首を横に振った。そうやって、何とか反応して誤解を解きたかったが、それは無理な相談だった。

「見える所でやるから、文句の一つだって言いたくなるのよ。いい年して」

しかし、つき合いのあった洋子に、そんな誤解が生じるということは、村野に過去、そのような趣味があった、という可能性の裏返しなのかも知れない。

「おい。何だとお！ 聞いていりゃ、いい気になりやがって。ふざけるんじゃねえぞ。テメエこそ、変なビデオや変なDVDの見過ぎじゃねえのか」

その狭い部屋は整然と奇麗に片づけられており、淡いグリーン色のカーテンと壁紙も施され、洋子が几帳面であることをうかがわせる。しかし、そのビデオDVDデッキやテレビなどの電気器具は質素で、それほど裕福な暮らし向きであるとは、認められない。

「あんたねえ。DVDなんて、あんたじゃあるまいし、余計なお世話なのよ」

「それよりもだなあ。ここに来たのいいが、この女を、どのように処理するかだよなあ」

処理、という言葉聞いた途端、智美は、サルグツワを通し、懸命に力一杯、悲鳴を上げた。「ウルセエ！ テメエ、さつき車の中で、騒ぐなよと、何度も何度も、ウメボシを三連発で食った後ぐらい、口酸っぱくして言っただろうが」

実は、智美は運ばれて来た軽の車内から降りる間際に、すでに正気を取り戻していたのだ。そして、村野の「ウルセエ」という一喝に、智美は呻くのを止めた。一方、洋子は、隅にあった座椅子を整えて、智美を座らせようとする。

「余計なことは、するんじゃ、ねえ」

しかし、そんな村野の叫びを無視して、洋子は作業を続け、智美を座らせた。男の恫喝を、どの程度の怒りの結果か見立てて、結局軽視する女と、それを言葉の上では怒るが、結局は許す、男。…：そういう関係なのだ。そのように、智美は感じていた。

「俺がいつ、女にサルグツワをかます趣味があるって言ったよ」

「だってあんた、いつだったか、私が前に住んでたお店で、ホザいてたじゃないか」

以前住んでいた、店。これで、村野と洋子が、相当に長いつき合いである、ということが智美には想像出来た。

「あ、あれは……だなあ」

「日本酒に煮込みをカキ込みながら、あんた、ムチとサルグツワの経験なら、何度もあるって、偉そうにホザいてたじゃないか」

利山洋子には、村野裕行に夢中になった時期があった。しかし、相手の村野は洋子とは親密だが、深くは付き合わず。……かと言って女べらボウ好きの変態であることには間違いなく、他にも洋子と同じレベルの女を何人も、作っていた。要するに、複数女に並行して軽く付き合う、いや、そうしなくては生きて行けない、という節操のなさ。それが、村野裕行という男の、隠れた別の側面なのだ。

「俺はなあ、馬に乗って、クツワを引つ張りながら、馬のケツにムチを当てたことがあるって、言っただけだ」

「ああら。そうだったかしら……。ま、考えてみりゃ、元競馬の騎手ですモンねえ。クツワもムチも、当たり前、か」

元、競馬騎手、村野裕行。知る人ぞ知る、関東ブロックの公営競馬で活躍した、名騎手。これ

も、彼の一面である。だからして必然的に、女にもモテた。しかし、何時の間にか、その名前と雄姿は、競馬ファンの前から、たなびき遠ざかる煙のように消え去って行った。すでに夕ダの人となつてから、何年も月日が経過していた。

「おい、洋子」

「あなたに呼び捨てにされる筋合いじゃあ、ないんだけど」

そう言つて、洋子も、苦そうにビールを口にした。

「デメエなあ、余計なことを、人質の前でベラベラ喋るんじゃねえ」

人質と聞いて、洋子は驚き慌て、プツとビールの霧を、村野に吹きかけた。

「汚ねえなあ、この野郎」

「あんた、人質つて何よ。……ホントに？」

それを聞いていた智美が再び、サルグツワの下でフガフガ言い始めた。これが、綿密な計画もなしに、ある一人の落ちぶれた中年男によつて始められた、長い長い、身代金人質誘拐事件の始まりであつた。

*

*

「よかつたわねえ。サルグツワ、外して貰えて」

翌朝まで村野は二階には上がらず、一階奥の狭い居間で、呑みながら身体を横にしてグズグズしていた。酔っていたものだから、銭山智美の口に食い込むサルグツワだけは緩めてあげよう、

という、利山洋子の進言にも、執拗には反対しなかった。それどころか、洋子がさらに、それを勝手に外した際にも、村野は文句を言わなかった。

「でもまだ、腕にロープが食い込んで、痛いんです」

テーブルを囲んで車座に位置する三人。洋子が茶を入れた。赤ら顔の村野には、すでにそれを口にする気もないように見える。

「何度も縛られると、こいつに手なづけられちゃうわよ」

うがった見方をすれば、洋子は自分の経験から、そのように喋っている風でもあった。許すすぐに付け上がる、いい加減な性格。洋子は、村野の、大人としての自覚や責任感など、一切、認めてはいなかった。

「そんな、手なづけられるなんてことは、百パーセント、いいえ、百二十パーセント、絶対にありません」

その時、痛そうな、智美の腕の腫れに、洋子は気づいた。解らぬようにそと外してやろうかな、とも考えていた。しかし、それが原因で智美が逃げ出すと、村野が半狂乱に陥り、この店が修羅場と化してしまう……。そんな危機感を同時に抱いて、智美に対するそれ以上の解放には躊躇した。事実、洋子の以前の店では一度、洋子が酔客とイチャついた、という些細な思い込み理由から、酔い狂った村野が猛獣のように暴れ出し、メチャメチャに破壊し尽くされたことがあった。しかしそれでもその事件の際には、金回りの良かった村野が改修費用をポンと現金一括で支

払い、周囲に文句のモノの字も言わせず、洋子を驚かせたのだった。

「テメエ、人質のクセに、うるせえぞ」

「あんだ、この娘があんたに何をしたのか知らないけど、正直に痛いって言ってるんだよ。ロープが駄目なら、せめて目隠しだけでも」

「目隠しを外したら、メンがバレルだろうが、メンがよお」

……ということは、村野はこの女にまだ、顔を見せていないのか……。人質。メンが、バレル……。話の端々に感じられる、やけに濃いキナ臭さに、洋子は、村野がまた、ハツタリの大嘘を言っているのではないかと勘繰っていた。これはやっぱり、村野のくだらない冗談半分の遊びではないのか？ 洋子は、この時点でもまだ、そのように思い込もう思い込もうと努めていた。

「テメエ、これ以上ズベコベ言つて騒いだら、またサルグツワをカマすぞ」

「わ、わ、解りました」

目隠しについては、サルグツワの時のようには、村野は寛大ではなかった。確かによく見れば、智美はアイマスクと毛糸帽を着けて目隠しされた上を、ガムテープをグルグルと巻かれているので、両眼に対するダメージは少ないものと推察出来る。恐らく、相手を眠らせた後にでもアイマスクを着けさせ、それをガムテープで固定したに違いないわと、洋子は勝手に想像していた。そして、目隠し外しに寛大ではないということは、村野は酒に酔ってはいたものの、誘拐身代金強奪については、ある意味、本気で考えている、ということにも繋がる。

「ところで、あなたねえ、どうしてこんなことになっちゃったのよ。それに、わざわざ、せつかくの木曜日の晩に何だつてのよ」

とにかくもう少し、探りを入れてみようと言子は考えながら喋っていた。

「私にとっては、定休日の大切な晩なんだからねえ」

洋子は村野とは、この新しい店に移転する以前から、すでに関係を絶っており、客として村野が訪れることも、皆無だった。

「今日が、テメエの定休日だから、来たんだよ」

「そうか。最初から私の休みの日を調べて、ねぐらをアテにして、やって来たのね」

誘拐人さらいをやろうと思いついた瞬間に浮かんだのが、逃げ場所、隠れ蓑、だったのだろう。追いかけられれば隠れ場所が必要だ、という、短絡的な連想思考で、とりあえず昔の女の店が思い浮かんだのだ。都合の良いことに、付き合っていた際の店からは移転しており、警察にもしばらくはバレまい……。その程度の大枠でおおざっぱな予定は、村野なりに描いていたのだ。洋子は、そう感じていた。

「テメエの休みをアテにして、悪いのかよ」

「鍵まで、あらかじめ取って用意して……」

「いいか。俺はなあ、借金だらけで、四方八方塞がってるんだ。こうなりゃあ、何でもするぞ」

洋子は、八方塞がりになる前に、もっとやるがあったらうに、と心の中でののしつてい

た。お気楽楽観主義だった全盛時代の村野には、金の収支などという事柄は、自分には関係のない世界の、絵空事だった。入った金は使うために存在する、程度に軽く考え、給金をその晩にすべて使い切ることもあった。そんな村野を知っているから、当時の洋子も村野を見捨てて深入りせず、男女の関係をきっぱりと断ったのだった。

「ケガして競馬の騎手を廃業してから、傾いたわねえ、あんたの人生」
「ウルセエ！」

また、村野の口癖が出た。そして、そんな村野を横目に、ため息をつきながら、洋子は目隠しされている銭山智美に向かって、話し始めた。

「あのねえ。この人、競馬の騎手をやめてから、工務店の社長をやってたって、変わり種なの」
「社長さんを……」

「まあね、元競馬騎手の工務店って言えば、誰でも興味を持つわさ。腕なんか二の次よ」
社長と言われて気分が良くなったのか、村野にしては珍しく、横になったままではあったが、素直に話に乗って来た。

「あんな工務店、営んだ方がいいが、バブルがハジけて、借金づけじゃねえか」
「借金を返そうにもねえ、倒産するし、借金取りには毎晩追われるし……」

なるほど、そういういきさつがあるんだわ、と、智美は心の中で村野の顔を想像しつつ、考えを巡らしていた。

「借金取りに毎晩追われるって、どうして、あなたがそれを、知っているんですか」

「それはねえ……」

洋子が言おうとしたら、村野がいきなり、言うんじゃねえ、と、やけに強く制した。そして、ちよūdōその時、比較的直近でパトカーのサイレンが響き始めた。段々と近づく、という感触ではなしに、突然鳴り始めた、という響き方であつた。だから一層、その音は村野の心臓を刺激したようだ。緊張した村野は、サルグツワ無しの無防備な智美の口に自分の手をかぶせ、ジッとサイレンの動向を探っている。一方の智美はというと、先程まであんなに恐そうだった村野に対し、元競馬騎手で工務店の経営者で、失敗連続の人生だった、という素性が解ったからか、恐れというより、同情に近い感覚なのだろう。ジツとおとなしくしていた。

やがて、サイレンが遠ざかって小さくなって行つた。そして、それを認め、村野はホツとして、智美の口から手を離した。

「ヤレヤレ。冗談だと思つてたけど、あんた、本当にこれ、趣味じゃなしに、何かやらかしてんのね」

ヤバイ、と、洋子は、多少不安になつた。

「今の俺に出来ることつて言えば、これしかなかつたんでえい」

「これしか、つて？ 何よ、あんた」

「現役女子大生身代金誘拐人質事件です」

智美があまりにもはつきりと言ったので、洋子はガクツとコケそうになった。

「な、何ですって！ あんた、女子大生？」

「もつと大人っぽく見えますか？」

「中学生のコギヤルだとばかり」

そう言われ、智美もガクツとコケた。智美をコギヤルと言った、その利山洋子は、子供を育て上げたことは、なかった。だから年齢を比較すると、ついつい自分自身の子供時代と比較してしまう。すると大抵、比較対照している今の子供の方が、大柄で大人っぽく見えるのだ。確かに銭山智美は、目元は確認出来ないものの、大学生にしては小柄で子供っぽく感じではある。

しかし中学生はないでしょう、中学生は。そんな風に智美は、洋子の大きさに、怒り心頭で、口をとがらせた。

「モロに失礼ですねえ。とにかく私には、目隠しやサルグツワの趣味なんて、カケラもありませんし、コギヤルでも、ありません」

「ウルセエ。少しは黙ってる」

言い争いにジレて、黙っていた村野が怒った。智美は、それを機に静かに収まった。

「あんた、ユーカイって……。それじゃあ、この娘は本当に、あんたの女じゃないの」

村野が人質とかメンバレとか言っているが、所詮、些細な、女との痴話喧嘩なのではないのか、と、洋子はタカをくくっていたかっただが……。

「俺の女だと？ 何をバカな。こんな小娘を、自分の女にする訳、ないだろうが」

それを聞いて、今度は、智美の方が怒って言った。

「私こそ、こんな人の女なんかじゃありません。私にも選ぶ権利があります」

「テメエ、ウルセエ！」

洋子は、確認しなかった。これは、村野とこの女の痴話喧嘩であって欲しい。でなければ、確実に誘拐人質身代金強奪事件に展開する。そして、それだけではなく、洋子自らも共犯として巻き込まれてしまう可能性が出て来るのだ。

「本当に、この小娘を、誘拐したの？」

「テメエ、ふざけるな。これが、ママゴト遊びに見えるって言うのかよ」

「あんたのことだから、もしかしてと……」

村野は、寝たままガクツと肘突きを外してしまい、テーブルの角に頭をぶつけた。

「痛えなあ。ふざけるんじゃないぞ」

「どうしてこんなこと、しでかしたのよ」

少し考えた後、村野は答えた。

「仕方がなかったんだよ」

洋子は、ため息をついた。

「仕方がなかったって言ってもねえ、無理な誘拐をしてお金が入るとでも、思ってるの。無理な

誘拐は、罪が重いだよ。無理な誘拐をして儲かったって話は聞いたこともないし、無理な誘拐をして誉められることもないでしょ。無理な誘拐は……」

説得しようと、あまりに何度も、無理な誘拐無理な誘拐と、洋子が言うものだから、酔った村野には、「無理な誘拐」が、「村野裕行」に聞こえた。こういう現象を巷では、強迫観念、という言葉で片づけている。

「おいっ。年増女」

「うるさいわねえ。私には、利山洋子っていう、レッキとした名前が、あるんだ」

「だから、トシマの洋子じゃねえか」

「トシヤマ・ヨウコ、よ」

「テメエ、それより、人の名前を何度も何度も、何度も何度も言いやがってよお」

「ああら、そんなこと、したかしら」

「村野裕行、村野裕行って、何度も何度も」

ここではつきりと、銭山智美には、目の前の、姿が見えない男女の名前が、村野裕行と、利山洋子であることが、苦勞せずに解った。

「ムラノユウコウ……。ああ、何を言ってるの。偶然じゃないか。バツカみたい」

村野は一瞬、自分が酔っていて聞き間違ったのかと慌てた。

「ど、どうしたってんだ」

「私が言ったのは、無理な誘拐。あんたが無理な誘拐をしたって、私は言ったのよ。それをあんた、聞き間違えて、村野裕行？ 酔っちゃって。バツカじゃないの？」

「ウ、ウルセエ！」

村野は、我を失っていた。

「自分の本名を、モロにバラしちゃって」

そんな、利山洋子の名前だって、バレているのだ。そういう意味では、五十歩百歩、似たりよつたりなのではあるが……。

「仕方ねえな。俺の名前をはつきりクッキリしっかりと聞かれたからには、この小娘は、消すしかねえぞ」

変なふうに話がコジレて、智美に矢が向けられ、今度は、智美が我を失いかけた。

「お、お願い、助けて」

「ウルセエ」

「私、絶対に言わないから。あなたが村野裕行さんで、酔っ払って『無理な誘拐』を聞き間違えて、本名の村野裕行さんであることを人質にあっさりバラしちゃったなんて、絶対に言わないから」

全部バレバレじゃないの、と、洋子は両手を大きく拡げて、コリヤダメだとばかりに顔を横に振った。

「テメエ、小娘のくせに、よくも俺の名前をしつかりクッキリと暗記しやがったな。ふざけるんじゃないぞ」

「た、助けて！」

「あんた。怖がつてるじゃないの。掃除機みたいなダミ声は、やめなさいよ」
「バカタレが。これが俺の普通の声だ」

その時、言い訳している村野の声も、掃除機の排気音に似ていた。

「普通の声だと言われても、怖い」

「そうよねえ。私も、おんなじ意見だわよ」

洋子と智美の間に、奇妙な連帯感が生じつつあった。

「テメエなあ、人質に賛成して、どうなるってんだ」

「あんたに言われる筋合いじゃないでしょ」

「そ、そりゃそうだが……。おいつ。そんなことより、次の手を考えろ」

「何よ、次の手って」

「現金をせしめる方法だよ」

正直なところ、村野は、そこから先の道筋をきちんと決定してはいなかった。幾通りかの計画は青写真に乗せてはいたのだが、これで行けると最終的に決めた方法を、まだ持ち合わせてはいなかったのだ。

「私は、誘拐なんか、まっぴらよ」

「私も、右に同じく反対です」

「どういう訳だか、智美もタイミング良く、口をはさんで来た。

「テメエ、誘拐人質事件に、人質本人が賛成するわけ、ねえだろうか」

「それじゃ、私を帰して、ムリノさん」

洋子の存在に気を強く持てるようになったのか、智美が堂々と、自分の意見を話し始めた。そして、それに焦ったのか、自分を「ムリノ」と呼ばれて怒ったのか、村野は身体を起こして、目隠し姿の智美に、スゴんで言い放った。

「俺は、ムリノじゃねえ、村野だ。テメエ、俺に喧嘩を売るって言うのか？」

酔った村野がスゴんでみても、そんなに恐くはなかった。

「喧嘩を売るなんて……。い、いいえ。決してそんなことは……」

「あんたねえ。この娘が資産家の子供か何かならともかく、突然大金をふっかけたって、うまく行く訳、ないでしょうが」

「任せておけ。その点は、ぬかりねえ。こいつはなあ、最近、経営状態がすこぶる安定している、銭山総合病院の院長の一人娘で、銭山智美、って言うんだ」

「そうですね。私が確かに、銭山智美です」

銭山総合病院。「スナック・洋子」から、高速を北に車で三十分ほど。そんな場所に位置する

近郊都市にあり、最近大きな病棟を増築したと評判の病院。患者の受けも良く、地域医療に熱心だと地元では好評の医療施設だ。利山洋子も村野裕行も、以前の住居が、銭山総合病院の隣町に位置していたので、そのスケールについては熟知しているのだ。

「そうだったの。あの銭山総合病院の……」

その時の利山洋子は、やけに感慨深げに、銭山総合病院を、思い起こしていた。

「私のことを、調べたんですか」

「ああ。調べまくったさ。テメエが、黒薔薇女子大の文学部心理学科にいるってことだって、ちゃんと知ってるぜ」

私立黒薔薇女子大。通称、バラ女。ブルジョア風の格調高いコーヒープラウン色の豪華な校舎が、ドーンと敷地の中央奥にそびえ立ち、正門は、高価で希少な金属を下地に用いているかのごとく、深く荘重に光り輝いている。一昔前まではお嬢様学校としてつとに有名で、小学校から中学高校大学まで一貫して、すべて黒薔薇の出身であることが、一つのステイタスになるような時代もあった。しかし今現在では、入学試験もそれほど厄介な難関校ではなくなり……、とは言うものの、歴史が物を言い履歴書作成にもハクが付く、知名度の高い手頃な有名大学、といった存在だ。

村野は、銭山総合病院院長の娘である銭山智美に眼をつけた後、彼女が黒薔薇女子大に通っていることを知り、その黒薔薇女子大についても下調べしていた。用意周到と言うよりも、自分と

は無縁のブルジョア女子大、という、未知の甘い風が吹き巡って来そうな、そんな別世界の雰囲気味わってみたい、という感覚で動き廻り、調べまくったのだった。

「そう言えば、少し前からハデな衣装の覆面オジサンが、正門前の商店街で時々踊ってるって、話題でした」

そのオジサンは、顔には仮面をあしらった目出しの覆面マスク。衣装はカナリやみたいな明るい原色を含む、ヒラヒラ付きの赤青黄色。帽子にも、ロビンフッドみたいな、長い羽根が付いている。どう考えても、そこらにいる、普通のオジサンでは、なかった。そして、苦勞してそんな変装までしていたのに、智美に踊っていたとか言われ、村野はガクッと来た。

「あれはなあ、踊っていた訳じゃねえ。れっきとした、女子プロレスの勧誘のつもりだ」

「……あれがねえ。私、最初はてつきり、最近流行っている、ストリートパフォーマーの一人かと……」

その際には、村野がプロレスの覆面を用いながら、一本釣りするように下校する女子学生のグループをプロレスに勧誘していた。しかししかし、相手にする学生など当然のことながら、皆無だった。身振り手振りで説明してはいるが、まるで反応がない。バツカじゃないの、と言った雰囲気、やり過ぎされている、という感が強かった。それもこれも、銭山智美のみに声を掛ければ怪しまれるという思い目論見から、フェイクのつもりで、他の何人かに、その覆面姿で勧誘を試みていたのだ。しかし、当然のことながら、それが特段に有効な筈もなく由もなく、断続的に

勧誘五日目十五件目位の時、とうとう商店街と通行人から警察に通報が入り、村野は慌てて駆け足で遁走するハメに陥ったのである。

村野は、それを苦虫をかみ潰すかのごとく、思い出しつつ、ビールと乾き物のつまみを口に投げ込んでいた。

「あ、あれが、ストリート……？ ストリップショーとはなんでい、この野郎。とにかく、俺は、俺はなあ、踊ってなんか、いやしねえ」

「それじゃあ何だったんですか、あれは」

「デメエの気を引こうと、何度も大げさに動き回っただけだ」

それを聞いていた洋子は、呆れて、村野を横目で睨みつけながら、罵るように言った。

「あんたなら、ピエロの踊りに間違われてもさ、充分に納得が行くわよ」

「ウ、ウルセエ。人のことが、言えるか」

洋子は、こんな男を野放しにして、勝手にさせておいたら、事態がますます複雑に絡まり、最後はポロポロに崩壊する憂き目を見ってしまうと感じていた。

「どうでもいいから、あんた、この小娘を、とっととさっさと早く帰して来なさいよ」

「そうは行かねえ。こいつあ、金ヅルだ。俺には借金があるんだ」

それを聞いて、智美が、待つてましたと合の手を入れた。

「私の貯金なら全部あげるから、何も言わずに、このまま家に、帰らせて」

一瞬の沈黙が走った。注目の村野は村野で、本当なのかと、驚きと疑惑、丁度半分ずつの、複雑な凝視。そして、その眼が、酔いと深い猜疑心で、ストンと座っている。

「そ、そりゃ、良い心がけじゃあねえか、ネエちゃんよお。で、一体、いくら貯金しているって言うんだ。嘘じゃねえだろうなあ」

「嘘なんか……。郵便局の積み立て定額預金を、もう、かれこれ五年も続けています。いわゆる、ツミテイ十年モノ、です」

具体的な話が出て来たので、村野は、これは本当かも知れないと興味心をくすぐられた。横で聞いていた洋子も、これは、世間で言う、ガセネタじゃない可能性があるなど、さらに聞き耳を立てた。

「テメエ、オイ、黒薔薇。お見逸れしちゃったぞ。そりゃ、すごいな」

「若いつていうのに、立派な心がけだねえ、この娘は」

「そ、そんな……。立派だなんて……。大したことじゃあ、ありませんよ」

良い巡り合わせで、大きなツキが廻り巡って来たのかも知れない、と、村野の心は踊り、気分は舞い上がって行った。

「それで、いくらあるんだ」

村野は勢いで、グイッとビールを含んだ。

「月々千円ずつ、合計五万九千円」

それを聞いた村野は、その口に含んでいたビールを、反射的にプウッと吹き出してしまった。ビールの霧を浴びた洋子が、嫌そうに手拭いで顔を拭いた後、ついでにテーブルも拭き、最後に村野に投げつけた。村野は村野で、その手拭いをしっかりキャッチした後、捌け口を智美に向けた。

「テ、テメエ、黒薔薇。こっちはなあ、命を張ってテメエを調べ上げて、マジで本当に人さらいまでしたんだぞ。五万九千円の、郵便預金だとお？ ふざけるんじゃねえぞ、この野郎」

村野は、本当に、怒って、いた。

「あの……。多少は、利子も、付いていますよ。でも、最近は、利率の方が、あんまり……」

「そ、そ、そういう問題じゃあ、ねえ。五万九千円程度のはした金で、はいそうですかと、テメエを帰せるとでも、思ってるのか」

「はい」

その瞬間、村野と洋子が、ドタツと、ズッコケた。村野は、酔いがすっかり、抜けてしまった。「す、すみません。言い間違えました。いいえ、が、この場合、正解でした」

村野は我慢し切れずに、手元にあつたナイフを取り上げ、相変わらずガムテープで目隠しされている、目の前の智美の頬を、その光る刃物で、ピタピタと叩いた。

「ネエチャンよ、ふざけるんじゃあねえぞ、この野郎。テメエの心根が、解らねえ。こっちはなあ、子供の遣いじゃあねえんだぞ」

「そ、そりゃムリノさんは、大人ですから」

「ウルセエ！」

ア、ア、とため息をつきながら、村野は再び、ゴロンと横になってしまった。

「やっぱりなあ。ツキなんか、そんなに都合良く飛んで来る訳は、ねえよなあ」

と、部屋の天井を見ながら、村野は大きいため息をついた。そして突然、真面目に……。

「やっぱり、最初の方針通り、誘拐人質身代金強奪しかねえ。この小娘を人質に、身代金をせしめるしか、ねえんだよ」

それを聞いていた洋子は、村野が真面目に本気で誘拐人質身代金強奪を口に出したので、焦りに焦った。

「あ、あんたねえ。誘拐、誘拐って言うけどねえ、誘拐には、プランを立てる、綿密で緻密な頭が必要なんだからね」

「ダメエ。それじゃあまるで、俺には考える頭がないみたいじゃねえか」

「あんた、そこまで言うのならよ、これから先のあんたの計画を、ちゃんときちんとはつきりクツキリバツチリと、話してごらんよ」

出て来た村野の案をケチヨンケチヨンに批判して罵れば、村野も自信をなくして、銭山智美を解放するかも知れない、と、洋子は、希望的観測を抱いていた。

「まず第一に、銭山総合病院に、身代金を要求する」

すると今度は、村野の説明を聞いていた智美が焦って言った。

「あの……。その際には、絶対には、事務局には電話しない方がいいですよ」

「どうしてだ？」

「鉛筆一本にまで、徹底して儉約運動をしますから。とてもとても、身代金なんて、そんなもの……」

銭山総合病院事務局の大部屋には確かに、「儉約」と書かれた用紙が、いたる所にベタベタと貼ってあった。ケチそうにチビた鉛筆を三センチの長さまで使う事務局長が、儉約を徹底しようと、気張って書いた毛筆ポスターなのだ。それも使い終わった去年のカレンダーの裏側を用いた、徹頭徹尾ケチを貫いた、ケチケチ儉約ポスター。

「ふざけるんじゃないやあねえ。院長の娘の身代金さえ、出さないっていうのか？」

智美は、まるで普段の不満を全て吐露して暴露するかのようには、事細かに事務局の体質、いや、父親である院長を始めとした、病院側の儉約の徹底ぶりを話していた。

「精一杯、ネギッて来ると思いますよ。一桁大きいとか、もうひとこえ、とか。そうだなあ……。ダンナさん、もう少し勉強してくださいな、とか何とか」

「……ったく。……しようもない。解ったよ。ちゃんとテメエの親父に、直接、きつく話すことにしよう」

そんな話にもめげず、まだ身代金を諦めない村野に、洋子が慌てて口を挟んだ。

「一体、どのように、きつく話すって、言うのさ」

「そこが、まだ完全には、煮詰まっちゃあ、いねんだよ」

痛いところを突かれて、村野はまた、ゴロンと転がった。そして、それに追い討ちを掛けるように、人質の智美までもが……。

「黒薔薇女子大まで私を尾行したにしては、ムリノさんの計画は、ズサンですよねえ」

「テメエなあ、調子に乗るなよ。俺はなあ、泣く子も黙る、天下の人さらいだぞ」

村野は、酔っていた。そんな村野が偉そうに言うものだから、洋子は余計、頭に来た。

「衝動的で無計画な、人さらいよ」

「ウ、ウルセエ、この、トシマ女」

村野裕行は利山洋子にとっては、まるで、世話のやける、近所のイタズラ坊主のような存在であつた。

「そんなに言うなら、あんたねえ、誰が聞いてもちゃんと納得が行くように、あんたの計画を説明してごらんよ」

「俺だって、脳ミソにシワ寄せて、身代金の要求方法を考えているんでいい」

村野が意気がつた。それに負けまいと、洋子も声を張り上げた。

「だから、ちゃんとプランをはっきりと！」

村野は、絶対にやり遂げるぞと意地を示しつつ、自分の鞆から地図を取り出すと、それを大き

くテーブルの上にも、ササッと拵げた。村野がこれから何を話すのだろうか、洋子は注目し、智美は聞き耳を、そば立てた。

「プラン、その一。『高速道路の平浜出口看板のポール脇から、五千万円入りの鞆を真下に投げ落とせ』」

鉛筆で、図を書いて洋子に示す村野。智美も、平浜という場所が銭山総合病院の近所で、その地元の方面に伸びている高速道路の地点だったので、地図を見ないでも、おおよその見当がついた。しかしそれよりも、問題なのは、金額の方だった。

「お話中に何なんです、うちの病院じゃなあ……。二百万円位なら、出すかも知れないけど」
「人質誘拐事件で二百万じゃあ、ハクが付かねえだろうが、ハクが！ バカタレが」

感情剥き出しの村野に対して、洋子の方は対照的に、すこぶる冷静だった。

「それはそれとして、もつと根本的な問題としてよ。あんたねえ、高速道路の下で、どうやって待ってるのさ」

「車だ。もちろん今回のワンボックスと同様、調達して来て、ナンバーを付け替える」

「お言葉ですが……。落ちて来た鞆を取りに行く時、警察も一斉に、ヨーイドンで、集まって来ますよ」

智美は、自分の意見を丁寧に説明した。平浜出口看板ポール下の一般道路に車で待機していること位なら、普通に出ることもかも知れない。そして、村野の期待通りに、その出口の看板直下

に、札束の入った鞆が落ちて来るのかも知れない。しかし、それを急いで村野が取りに行ったとしても、同時スタートで、恐らく周辺に散らばって監視している体育会系出身や、マツチヨの刑事警官大勢が、大挙して村野めがけて突進して来るだろうと言うのだ。そして、追いつめられて切羽詰った村野が、たとえ周囲に発煙筒を投げつけたり、二セの拳銃で威嚇しながら逃走しようと試みたとしても、相手は催涙弾も使えるし、場合によっては放水車だって準備するかも知れない、と言うのだ。実際には人質の効果で、ここまで犯人側を追い詰めはしないだろうが……。

「この娘の言う通りだよ。ダクメだ」

洋子の言葉に、意外にも村野は、ガツカリともせず、アッサリと納得した様子を見せた。そのアッサリ振りを見て、洋子はますます、コリヤダメだ、と確信した。

「それじゃ『動いている通過中の電車の中から、宝田川鉄橋下のボートめがけて、札束が入った鞆を投げる』って言うのは？」

そう言うなり、村野は手帳に図を書いて、洋子に見せた。

「投げる方が、プロ野球のピッチャーぐらいコントロールが良くなかつちゃあ、ボートになんか絶対に、お金は入らないわ」

「それにもしも、鞆が水に沈んじゃったら、川に自分で、潜らなくちゃなりません」

直接、村野や洋子の顔が見えない智美も、そのプランの欠陥は、しっかりと見えている、という口振りだった。そして「プラン、その二」を行なった場合に想定される悲惨な状況と結果を、

説明し出した。

ボートで待つ村野のそばに、鞆がドボンと落ちて来る。慌てた村野が川に飛び込むが、その札束入りの鞆は、ブクブクと水没してしまふ。悪いことに、鞆に気を取られていた村野も溺れそうになり、それを河川敷の土手にいた通行人に目撃される。慌てた通行人達は、村野を助けようと、川に飛び込む者もいれば、携帯電話で警察に通報する者もいる。しかし、意外や意外、警察官の到着が速い。実は、それは当然の成りゆきなのだ。何故なら、すでに村野の様子を周辺で監視し、伺っていたのだから。その後、刑事警官のボートが、溺れかけた村野の所に急行する。岸辺の土手では、通報でやって来た自転車の警察官を含め、多数の野次馬で大騒ぎとなる……。

「全然、ダメじゃないのよ」

智美の説明を聞いていた洋子が、村野を罵った。

「それもそうだな。投入れ作戦もダメ、か」

このプランも、村野は、呆れ返るほどあっさりと放棄した。

「どうするのさ」

村野には、まだ計画が残っていた。

「その三。『銀行口座に、金を振り込め』」

安直な方法に、洋子は手を振って、馬鹿馬鹿しさから来る怒りを、大きな仕種でモロに示し、智美は智美で、首をかき上げて不同意を表わした。

「口座は、ちゃんと用意してあるの？」

「あたぼうよ。俺の新規口座がある。名前も架空の会社名にしてある。後で、使うことがあるかも知れねえってな」

「何て言う会社ですか」

「金田瀬商会。金田さんの金田と、瀬戸内の瀬で、カネダセ」

洋子の怒りが、さらに増した。

「あんたねえ。何を言っているのよ。そんないかがわしい名前の口座にお金を振り込ませたら、名義を登録したあんた自身が、イの一番に怪しまれちまうでしょうが」

智美も同調した。

「それに、銀行には、防犯ビデオや書類やら、必ず記録が残っているでしょうからね」

「考えが甘過ぎるのよ」

村野は、タジタジになった。

「そんなに言うなら、お前の口座を使えばいいだろう」
全く、理屈の通らない、逃げ口上だった。

「マッピラよ。私が、疑われるじゃないの」

「それぐらい、我慢しろ」

「バカ言わないでよ」

ところが、そんな洋子と村野の言い争いを聞いていた智美が、呆れることもなく真面目に口を挟んだ。

「それじゃあ、思い切って、私の口座ではどうですか？」

村野と洋子は、顔を見合わせた。洋子には、智美がバカバカしいとは考えないのかしら、と疑問が湧いた。そして、村野は村野で、考えながら……。

「テメエの口座、ねえ」

「ムリノさんの金田瀬商会名義の新規口座よりは、よほど成功する確率が、高いと思いますよ」
まあね、それはそうかな、と、聞いていた洋子は、眼から鱗が落ちる気分になった。

「つたく……。人質に意見を出して貰う誘拐身代金強奪犯なんて、聞いたことがないわ」
「ウ、ウルセエ！」

「第一、この、黒薔薇小娘の口座にお金が入ったとして、どうやっておろすのさ」
そのように質した、洋子の予想を含めた説明は、こうなる……。

まず、コソコソでも、ひそかに、でもいいから、とにかく村野が、銀行のATMに向向く。マスクして顔を隠すかしくてはならない訳で、いかにもあやしげで胡散くさい。そんな村野の姿を防犯モニタで確認したのだろうか。村野が眼前のATMを使い出すと、奥から行員二人が血相を変えて現れ、村野の両側に一人ずつ立って、村野に質問を始める。危機感を抱いた村野は出金を諦め、慌てて両側の二人を振り切り、逃走しようとする。それをきっかけにして、奥か

らさらにガードマンやら関係者が多数出て来て、道路を走って逃げる村野を追いかけ出す。必死に村野は逃走を図るが、追いかけて来た行員のうち数人が投げた、防犯用のカラーボールが命中して、身体が真赤に染まる。結局、通行人に取り押さえられて、村野は、あえなく御用となる……。

こういった筋書きを、洋子はコト細かに出来るだけ具体的に大袈裟に話した。村野に、ムリで無茶な計画を放棄して貰いたかったからだ。そして、そんな洋子のシナリオを聞いていた村野が、それを単純に真に受け、スゴんで智美に迫った。

「おいつ、黒薔薇」

「私の名前は、銭山、銭山智美、です」

「ウルセエ！」

智美は村野に較べると、冷静だった。村野のスゴミのある唸り声も、智美にはそれほど効き目がない様子である。

「黒薔薇でも銭山でも、どっちだって、いい。テメエ、俺を、ハメようとしてるな」

「そ、そんなことは、絶対にありませんよ。ただ……」

「ただ、何だよ」

「捕まる可能性は、あるかな、なんちゃって」

「テメエ、調子に乗りやがって」

再び村野が、手元のナイフを智美の頬に当てようとした。そして、慌てて洋子が、それを制した。

「あんだ、そんなねえ、言い争いをしている場合じゃないんだよ」

洋子に睨まれ、村野はへこんだ。

「そ、それもそうだな。金をどうやって手に入れるかを、決めなくちゃならねえ」

村野は、まだ続けるつもりらしい。村野の考えを変えるのは非常に困難な技なのかも知れない、と、洋子は考え始めた。それならば、犯行もうまく行かずに、追いつめられて逮捕される可能性も少ない方法を、探さなくてはならない……。

「それじゃあんだ、思い切って、人混みの中、現ナマで勝負してみたら、どうなんだい？」

へんなことを洋子が言い出したなど、村野は感じた。しかし、智美には、洋子の考えが、ある程度通じていた。村野を無茶苦茶、ケチヨンケチヨンに罵る洋子だが、根は村野のことを大切に思っているのだ、ということ、智美は心で感じていた。

「おいつ。人混みの中って、どうすればいいんだよ」

「人のいない場所に、お金を投げたり置いたりさせるんじゃないかと、たくさんの人がいる場所を、利用するのよ」

一般の民間人がいない場所であれば、警察も要員を配置しやすい。当然のことだが、犯人が包囲され易い、ということになる。しかし、人混みの中であれば、確かに犯行自体も人の眼がある

ので難しいが、人混みに紛れて、捕まる可能性も少なくなる、という寸法なのだ。洋子のそんな思いを、智美も肌で感じ取ったのか……。

「私もそれがいいと、思います」

「テ、テメエは、黙ってる！」

食いついてきた村野を、さらに引き込もうと、洋子は続けた。

「そうねえ、例えば公園とか駅とか……。なるべく混んでる所が、いいわ」

「よしっ。もつともらしくしておこう。『カネアリ公園トイレ脇のゴミ入れに、紙袋に詰めた身代金を、放り込んでおけ』」

「ああ……。あの、駅のそばの」

智美の、あの黒薔薇女子大の最寄り駅。その直近の摩王電鉄カネアリ公園駅を寄りにもよつて、村野は口にした。そして一方、洋子の方は多少なりとも真面目に、話に乗っていた。

『警察には、絶対に通報するな』っていう一言も、一応、必要なんじゃないの』

何か今度はうまく行きそうだな、という甘い憶測で、村野は心が少し軽くなった。

「おお、おお、そうだな。『警察には通報するな』って、もつともらしいぞ」

しかし、そんな楽観的な村野に竿を刺すように、智美が懲りもせず、口を挟んだ。

「それはいいとしても、カネアリ公園トイレ脇には、誰が、お金を取りに行くかが、問題です。難しいと思いますが……」

「デメエ、黒薔薇。こりゃあ、うまく行きそうじゃねえかよお。何処がダメだつてんだ。納得の行く説明を、して貰おうじゃねえか」

今度も、自分の意見を充分に説明出来ると、智美は張り切った。その智美の説明によれば、こうなる。

公園トイレ脇のゴミ入れなので、やはり人目を気にして、何処か怪しげに村野が歩いて近く。そして、入っているはずの紙袋を物色し始める。しかし、それと同時に、公園のホームレスらしき男が近づいて来て、ゴミ入れの中の紙袋を取り合う格好となる。そんな状態で村野が手間取っている間に、私服で偽装した複数の刑事が、気づかれぬよう、徐々に輪を狭めて、格闘する村野とホームレスを包囲する。ホームレスとの争いに熱中していた村野は、やっと周囲の私服刑事達に気づくが、逃げようにも包囲され、時すでに遅し、という状況に陥っている……。

そんな説明を、最初のうちはフンフンと聞いていた村野も、結局こんな状況になるのかと、慌てた。

「こりゃ、犯行の手口が、ヤバ過ぎるな」

「あなた、危険過ぎて割に合わないよ。人さらいなんて、もう、やめた方がいいわ」

「私も、同感。そう思います」

村野は、前にいる二人と同様に、もうやめた方がいいのかも知れないと感じてはいるようだった。しかし、そこは、元騎手で華々しい活躍をした経験のある、男のプライドというものが、

堂々と村野の眼の前を横切って、決断の邪魔をするのだろう。

「ここまで来たからには、やめたら、男がすたるってモンじゃねえか」

「そんな見栄を、張ってる場合なの？」

「ウルセエ！ この黒薔薇小娘をかつさらってから、もう、カレコレ三十時間も経ってるんだぞ」
「私が女子プロレスの勧誘モドキに魅かれて、アンケートに答えちゃったのが、そもそもの間違いでした」

洋子は、重ね重ね呆れて、開いた口が塞がらなかつた。こんなに小柄な、いかにもセコそうなプロレスラーが、いると思ってるのだろうか、と。

「どうして、よりもよって、こんな男に、引かかっちゃったのさ」

「だって、女子プロレスから歌手デビューの道も開けてる、あなたもリングに上がって青春しよう、とか何とか言っちゃって、ホント、もっともらしかつたから……。営業畑のマネージャーさんかと思つて」

「バツカだねえ」

「だって……」

どう考えても、プロレスと村野は、真面目な連想ゲームの範ちゅうには、拡がって行かなかつた。

「どうしてよく見なかつたのさ。こんなに貧弱でセコケチそうなプロレスの関係者なんて、ぜ、

ぜ、ぜ、絶対にいいわよ」

「でも、覆面で変装していたムリノさんの表情は、スゴミがあっただんです」

そう言われた村野は、横になりながらも鼻を高くして、胸を張った。それを見た洋子は、再びため息を大きくついた。

「でもねえ。よりもよって、誘拐。おまけに、人質をとって身代金強奪？ バツカじゃないの？」

洋子がそう言うと、村野はまた、ノソツと起き上がり、決意して言った。

「後戻りは出来ねえ。電話する。ヤバいけど、カネアリ公園トイレ脇で行くぞ」

智美の頭の中には、やはり再び、銭山総合病院の事務局が思い浮かんだようだった。

「フウ……。事務局が問題。本当にやるんですか……」

「さらってから三十時間、か。まだ、おおつびらには、なつていねえだろ」

「行方不明から丸一日過ぎて、何も生じていない、つて、そうかなあ」

「一晩程度の行方不明は問題ねえだろ」

「そうかなあ……。大丈夫かなあ。すぐに、公開捜査になるんじゃないかなあ」

「ダメエなあ。人質なんだぞ、人質。俺の犯行の手に、いちいち文句をつけるな」

はつきりと村野にイチャモンをつけられて、智美もこれまで以上に、齒に衣着せぬ言い回しをする。

「文句をつけるな、つて言っても……。だって、計画が、ズサンもズサンも、いいところなんですよ」

「それは、この黒薔薇小娘の言う通り」

洋子までが同調したので、真面目に身代金要求の電話をしようと、気を引き締めていた村野には、余計響いた。

「ウルセエ。洋子、テメエ、携帯で身代金を要求しろ」

「イヤよ。何で私の携帯を使うのよ」

「テメエ。言うことをきかねえと、奥歯ガタガタにして、あの世に……」

また始まったと、洋子は辟易した。しかし、その時の村野は、従来の空威張りの村野とは、一味違っていた。

「何よ、途中で話を止めちゃって」

洋子にそう言われると、待つてましたと言わんばかりに、村野は、懐から携帯電話を取り出して見せた。その携帯は小型で、ピンクのストラップと小さなコアラの人形がぶら下がっており、どう考えても村野の持ち物ではなかった。しかし、そのかわいい携帯を黄門様の印籠のように掲げている村野を見ると、洋子はおかしくて笑わずにはいられなかった。

「なんでえ。笑いやがって。ふざけるんじゃないあ、ねえぞ」

「バツカじゃないの、いい年して。携帯に、コアラのストラップ？ ホント、バツカじゃない

の？ ……つたく」

それを聞いていた智美が、ボソツと言葉を挟む。

「あの携帯と、ムリノさん……」

その光景を見ているわけではなかったが、智美には、自分の前で繰り広げられている滑稽な一幕が、眼に浮かぶようだった。

「あんたが、コアラの人形ストラップって、タマかい？」

「バカタレが。こんなモン、俺のじゃねえ。この黒薔薇小娘が、生意気にも持っていていやがったんだ。電池はちゃんと外してあるからな。ザマを見ろ」

「あの……。今時の女子大生なら、スマホや携帯は、普通に持つてる必需品ですが……」

「テメエ、ウルセエ！」

実は、信じられないことに、村野は、何らかんら、携帯を手放してから十年、生き延びていた。

「電話をかけるのなら、あんたが、かけなさいよ」

「仕方ねえな。それじゃテメエ。この黒薔薇小娘を、しっかりと見張ってる」

村野がまた、空威張りのスゴミを利かせて、言う。

「そうしねえと、テメエ、この店、ガタガタにぶっ壊しちまうからな」

「わわ、解ったわよ」

その時の洋子は、前の店の一件もあり、その際の状況や出来事を思い出し、少し怖くなった。

「電話、かけるんなら、早くかけなさいよ。長電話するんじゃないよ」

「ホントに電話するの、ムリノさん」

「決まっているだろうが。遊びじゃねえんだ。銭山総合病院に電話する」

「患者と間違えられて、うっかり名前を言ったりするんじゃないよ」

「うるせえ。テメエらなあ、俺はなあ、泣く子も黙る、天下の人さらいでえい」

大見得を切る村野を目の前にして、進歩のない男などと、洋子は呆れていた。そんなバカ男から離れることの出来なかった、若き日の自分も、輪を掛けたバカだったな、と、洋子は心の中で、チヨロツと舌を出していた。

「それはそうと、電池は、どうしたかな。捨てちまったんじゃないか」

洋子は、呆れて物も言えなかった。しかし、智美の方はと言うと、心の何処かで、村野という、まともな誘拐犯とは程遠いこの人物に、何故か哀愁を感じて仕方がない様子だった。

*

*

第二章 身代金要求～その後に

翌日、利山洋子は、その日の晩から首尾よく店を再開するつもりで、トイレのついでに、人質になつてゐる銭山智美の顔身体を簡単にふいてやった後、午前中にはすでに買い出しを完全に済ませ、銭山智美にも食べやすいようにと、温野菜たっぷり味の味噌ラーメンを作り、食卓に並べた。しかしその一方で、村野裕行はと言えば、二日酔いと向かい酒のせいで、視線も定まらぬ無惨な状態となり、気持ち悪そうに、両眼をシヨボつかせている。

「御免ねえ、黒薔薇ちゃん。目隠しと、このロープだけは、外せないんだわさ」

「いいえ、そんなこと。こんなにおいしいラーメンを食べさせていただけなんです。私、縛られようが、ぶたれようが、あぶられようが、吊るされようが、これで充分ですから」

それを聞いた村野が……。

「テ、テメエ。い、異議あり」

村野が裁判みたいな言葉遣いをするものだから、洋子も合わせて……。

「はい、村野裕行君」

「ふざけるんじゃねえ。テメエ……」

村野は、何も言わずに、つらそうに息を上げ、二人を睨みつけている。そんな雰囲気の中、ふと温かなぬくもりが、私の頬に伝わって来ているな。何処か、不思議だけど家族的な空気だなどと、智美は心を感じていた。

「途中やめしないで。あんた、何か、言いたかったんだろ」

「テムエ、黒薔薇。俺は、ぶったり、あぶったり、吊るしたりは、しちやいねえだろうが、この野郎」

「そういうイメージが、あんたには染みついているのよ」

「ウ、ウルセエ！ この、トシマ女」

そんな村野を無視しつつ、洋子が智美の口そばに箸でラーメンを運ぶと、智美はうまそうに、それをすすった。

「おいしい、これ」

智美にそう言われ、洋子は心が弾んだ。いくら旨い物を作っても、目の前でグテングテンに酔っ払っている、そのヘンテコリンな誘拐犯には、知り合って以来一度たりとも、心をこめておいしいと言つて貰ったことなど、ありはしなかった。それだけに、洋子には智美が、いとおしくさえ、感じられた。

「黒薔薇ちゃん、あんたつてば」

洋子はそう言つて、幾度となく智美のロープを指差し、これを解こうと視線で村野に主張した

が、村野が徹頭徹尾頑固一徹で、それを通そうとはしない。洋子は、村野に暴れられてもしたら大変だと、それ以上、智美のロープについては、要求しないことにしたのだった。

「お店はどうするんですか、洋子さん」

「開けるわよ、当然。営業再開に、決まってるじゃないの」

そう言うと、または村野がノツソリと起き上がって来て……。

「それだけは……、ぜ、ぜ、絶対に、まかりならねえ」

「何、言ってるのよ。私のお店じゃないの。私の勝手でしょうが」

「テ、テメエ。ふざけるんじゃないやあねえぞ。ウブツ。気持ち悪い」

そう言うと、村野はそばにあった洋子の買物袋を手に取り無理矢理拵げて、顔をその中に突っ込もうとした。それを見た洋子は慌てて、その買物袋を取り上げ、代わりに脱ぎ捨てられていた村野のジャンパーを投げた。すると、不思議なことに、村野の吐き気が急にピタリと止まった。

「……つたく。あたしのブランド物に。何すんのよ」

「だからって、俺のジャンパーを投げるか？ テメエ、ふざけるんじゃないやあねえぞ。店開けたら、客の前で、オエツと、ブチかますぞ」

村野なら、こんなことさえやりかねないと、洋子は頭の中で、村野の過去の歴史を、再び手繰っていた。確かに、そんな醜い事件も、実際……、あった……。

「あゝあ、まったく。これじゃ、臨時休業にするしかないのかねえ」

すると智美が、ラーメンを呑み込んだ勢いで、せき込み、飛んだラーメンが少々、村野の頭まで達した。

「テ、テメエ……、黒薔薇。わざとやってるんじゃないやあ、ねえだろうなあ」

見えない智美に、洋子が、その時の状況を説明してやった。

「わざとなんか、やってないです。やろうとしたって、こっちは見えないんですよ。ムリノさんが」

「そ、そりゃ、そうだ」

「声は、聞こえますけど」

村野の肘付きが、ガクツとコケた。そして智美の方は、洋子が背中をさすってやると、やっと落ち着いて……。

「あの……。急に、お店をお休みにして、怪しまれはしませんか」

「それでも店は、開けるんじゃないやねえ。この、人質とはとても考えられねえ黒薔薇が、何をしでかさか、解らねえ」

「し、失礼ですねえ」

「テメエが余計なことをしなけりや、何もかも、バレることなく、万事うまく進んで行くんだ」

もうすでにカネアリ公園トイレ脇の一件は、銭山総合病院に連絡済みだった。結局、智美の携帯を用いることは、場所を特定される恐れがあるからと判断して、電池も入れぬまま、断念し

た。そして村野は、カネアリ公園駅から三十分程度北に位置する摩王電鉄、金満駅前の公衆電話から長電話にならぬよう注意配慮して、マスクをし、自分の喉仏を無理に右手で押さえつけながら、声色を変えて、村野なりに、とりあえず一工夫して、連絡し終えたのだった。

「ムリノさん。余計なこと、つて私は、今更、何もしたりはしませんよ。第一、こんな風に縛られて、一体、私に何が出来るつて言うんですか」

智美の言うことを聞いていた村野は、酔いが徐々に覚めて来た様子で、言葉にメリハリが出て来た。

「俺の声の方向に、ラーメンを飛ばすような奴の言うことは、信じられねえ」

「そんな……。ムリノさん……」

「俺は、ムリノじゃねえ。バカタレが。だがな、いいか。洋子と俺の接点なんか、そうやすやすとは、調べがつく筈は、ねえんだ」

「まあ、そりゃそうだわねえ。一緒に住んでたのは一昔前だし。あの時にゃ、籍も汚さなかったし。でもねえ……」

洋子は、その後、警察の捜査の編み目をくぐり抜けて、公園に置かれた現金を奪うことなんか絶対に出来はしない、と言いたかったのだ。しかし、村野はまったく別次元の事柄を考えていた。その、洋子の『でもねえ……』という台詞をきっかけに、村野の視線は、相変わらず目隠しされている、智美の方に向いた。

「……そうか。そうだったな。忘れちゃってた。考えてみりゃよお、この黒薔薇小娘が、全部、俺達の話を聞いちゃまってるな……」

村野のドスの利いた語り口に、智美は慌てふためいてしまった。

「わわ、私は喋りませんったら」

「そんなことは信用出来ねえ」

「村野裕行さんが、洋子さんの前のお店で、非常に親しい近所の常連だったなんてこと、絶対に言いませんから」

「ウ、ウルセエ。テメエ、しっかりきつちりハッキリ百パーセント、暗記してるじゃねえか」

村野が変なことを言い出し、ナイフを再びかざすのではないかと洋子は慌て、話を反らそうとした。

「で、でも、そうだとしてもよ、今大事なのは、あんた、身代金問題の方じゃないか」

その言葉に、フツと我に帰ったように、村野が表情を緩めた。

「それもそうだな。どうやって金をせしめるかだよなあ。要求した時間通りに札束がゴミ箱に入るとすれば、もう、約束の時間まで、残り三十分で勘定だ」

智美は、話題が現金の方向に向かって、ホッとしていた。洋子は洋子で、本当は現金授受の話など、寝た子を起こすようで、口にしたくはなかった。しかし、人質、つまり智美の命には変えられないと、咄嗟に考えた苦肉の策だったのだ。

「あんたが、カネアリ公園トイレ脇を電話したんだから、自分でカタツケなさいよ」

「しかし、なんだよなあ……」

智美には、村野が浮かない様子なのが意外だった。やはり現金受け取りが危ないと思っ
て
いる
の
だ
ろ
う
か。そして、そんな村野の、宙ぶらりんの態度に、今度は、洋子がイラつき出した。

「あんた、男なら男らしく、シャキッとしなさいよ。やめるんだったら、もう、やめる！ やろ
うとしてても、もう、やめる！」

「そ、それじゃ、どっちにしても、やめるって方向しかないじゃねえか」

「もういいから、やめるってお決めなさい」

「ウ、ウルセエ、文句言うんじゃない。テメエ、奥歯、ガタガタにしちまうぞ」

例によつて、空威張りが出て来たのかなと、智美は思った。

「あの……、質問してもいいですか？」

「ウルせえ奴だ。手短かにしろよ」

質問、という言葉に多少なりとも興味を持った村野は、横になったまま、ゴロンと智美と洋子
の
方
に、身体を向けた。

「これは形式上の質問で、どなたにでも何う内容なんですが……」

村野は、何処かで聞いたことがあるセリフだな、と感じた。そして……。思い出した。
「テ、テメエ。刑事みたいな口のきき方をするんじゃないやねえ」

「それじゃあ、ムリノさんは、ホントの刑事さんに尋問されたこと、あるんですか？」

「そりゃ何度も……。ウ、ウルセエ。早く本題に入れ、バカタレが」

そう言つて、村野はその一件を煙に巻いた。本当は、洋子の店をガタガタにした時と、客の前でオエツとやった際、近隣より通報が入つて尋問されたことがあったのだ。

「あの…。どうして、ムリノさんは、無理な誘拐なんかをしようと、考えちゃったんですか？」

「そうよねえ。誘拐、人さらいは、成功する確率は低いし、罪も重いつて、あんたもよおおくよおおく、知つてるでしょうが」

「そんなにムリノさんて、警察の御厄介になつてるんですか？」

「ウ、ウルセエ。そんな訳、ないだろうが」

「それじゃ、洋子さんは、どうしてムリノさんが、犯罪に詳しいつて、知つているんですか」

そんな智美の質問に、洋子は意外な答を返して来た。

「さつき、この人、異議あり、とか、ホザいてただろ」

「ええ。ムリノさんには、似ても似つかないセリフで、驚きました」

「ウルセエ！ バカタレが」

「昔ねえ、この人、工務店が傾きかけたバブル明けの頃、急に法律を勉強するつて言い出してね。昼間閉めてる私の店のカウンターに来て、勉強してたのよ」

「へえ。ムリノさんが、ムリに勉強……」

「無理に勉強してた訳じゃ、ねえ」

村野が机に向かう姿を想像しようにも、カナリやみたいな覆面をした道化姿の村野しか知らない智美には、なかなかその画が浮かびづらく、つつい苦笑してしまった。

「ム、ムリノさんが……」

「テメエ、ふざけやがって。俺は、ムリノじゃねえ。ムラノだ」

「どうしてまた、法律を勉強する気にならなかったんですか」

村野がまた、ドスを利かせた。

「俺の行動に、いちいち細かく文句をつけるな。テメエ……、俺が法律を勉強しちや、いけないって言うのか」

「いいえ、そんな……。滅相もない」

村野は、景気の悪化で将来を不安視して、資格取得を目指して、工務店経営のかたわら法律の勉強を始めたのだと説明した。

「で、資格は、取れたんですか？」

「駄目駄目、ぜんぜん」

「テ、テメエ、トシマ女。細かい事象を、全部喋るんじゃねえよ」

「ホントは、ねえ……」

わずかに、洋子の声が曇った。それに村野は気づいたが、表情を計り知る事の出来ない智美に

は、伝わらなかつたようだ。

「もう、いいだろうよ。あんまり、くっちゃべるんじや、ねえぞ」

洋子は村野のことを、事細かに知っている。それが解ると、ここ数年音信がなかつた二人だとは言え、智美は、洋子と村野は、今でもただならぬ関係……。少なくとも、ウマの合わない間柄ではないのだなど、悟つたようだ。

「この人にも言い分があるんだろうけれど、バブルがはじけて仕事がなくなっちゃつてさ、真面目に法律の勉強をし始めた矢先に、今度は奥さんがスタコラ逃げ出しちゃつたのよ」

恥ずかしそうに、村野は頭をかきながら、顔の向きを変えた。

「まあ……。そうだったんですか」

「それに……。私の方も、ボロボロ」

「もう、いいだろうよ、そのあたりで」

再び、村野がクサビを刺した。そこから先に、何か隠されているのかも知れないわ。智美は、見えない二人を目蓋の奥に想像しながら、心の中で呟いていた。そんな智美の脇にいて、村野は、自分の汚点を被瀝され、ことのほか、気まずかつた。

一方、智美はその時急に、右腕に痛みを感じた。だから右腕に身体が乗って力が加わらないようにする為、少し左に傾いて、座り直していた。

「あんだだつて、悪いのよ。工務店は傾く。あんたは昼間からブラブラ私の所にシケこんじま

う。奥さんが逃げて当然よ」

「お子さんはどうしたんですか」

「い、いねえよ、そんなモン」

「本人が子供みたいなモンだからねえ」

タイミング良く、洋子が言葉を挟んだので、村野は、それについて、引き込まれた。

「ウ、ウルセエ！」

「何言ってるのよ。ホント、いなくて良かったわよ。……子供は」

実際問題、その通りだと、洋子は考えていた。しかし逆に、子供がいたならば、今回の犯罪行為を村野が実行していたかどうか、と考えると、子供がいた方がよかったのかも知れない……。という論法も成り立つのだ。同じことを智美も考えているようだった。

「考えてもみてください。ヘタすれば日本全国に、自分の父親の顔が誘拐犯としてニュースに流されちゃって、超々、有名になっちゃうんですよ」

手配写真が出回ったとする。村野裕行の全国指名手配写真が、日本国中、全ての交番前に貼り出される。どこかトボケたその手配写真の顔つきに、通行人がチラと視線を当てて、慌て、その矛先を変える姿が思い浮かぶ。

「そうよねえ。あんなだけの問題じゃないんだ。気をつけなきゃ駄目よ。子供には大変な苦痛なのよ」

その、洋子のヤケにシンミリとした語り口に、智美も同調した。

「お酒に酔って、階段から足を踏み外してケガする程度の痛みじゃ、ないんですよ」

「ウ、ウルセエ！ 聞いていれば、いい気になりやがって」

「でもあんた、本当のことじゃないか」

「民放のテレビ番組だと、顔写真を大写しにされて、司会のミノタさんやクサノヤさんに、『逃げ切れるモンじゃないから、とにかく早く自首しなさい』なんて、画面を通して、諭されるんですよ」

「バックに音楽が流れてたりしてね」

洋子が、『かあさんのうた』をハミングし出したら、村野が、蛇のように睨み付けた。

「おい、いい加減にしろよ。ふざけるんじゃないぞ」

それで、さすがの洋子も、歌を中止した。

「考えてみれば、波乱万丈の人生なんですねえ、ムリノさん。競馬騎手から工務店経営。さらに法律の勉強。そして、究極の人さらい」

「ウルセエんだよ」

智美と村野の言葉に、洋子がプウツと煙草の煙を吹き上げた。

「ウルセエって、ホントのことじゃないか。それをなだめていたのが、運悪く、馴染みの店をやつてた私だった、ってことさ」

「最初は、ご夫婦だと思っていました」

智美は、正直に言った。

「俺が、こいつと？」

「誰が、こんなのと」

二人とも、否定し合いつこをしている。

「こ、こんなのとは、なんでえ」

「何よ、あんたこそ」

雲行きが怪しくなりかけた所で、智美は話を反らした。

「まあまあ、ちょっと待ってください。ムリノさんが前のお店で、そんなに特別な、馴染みのお客様だったのなら、聞き込みで調べて、やっぱりにここに、警察が踏み込んで来る可能性って、あるかも知れません」

「ここは大丈夫。バブルの頃のお店とは場所も離れてるし、ここに来る前に、一旦、私、引退店仕舞いして、アパート住まいしてたのよ。深い事情があつてね。無職のエアポケット時代さ。この男に、新しい店まで、ネチネチかぎつけられないようになってね」

「ウルセエんだよ」

「でも結局、バレちゃったけどね、この、お店もさ」

「俺に隠し事は、通用しねえんだよ」

洋子は、同じ屋号で店を新装開店した。それを村野は、電話帳と番号調べで、コマゴマと調べ上げたのだ。確かに村野のしぶとさしつこさがこの点では光るが、それもこれも、すべて、洋子と同じ屋号を用いたからなのだ。その辺りからも、智美には、洋子の村野に対する情が読み取れるような気がした。絶対に見つからぬようにするなら、全く想像もつかない屋号を新たに用いれば、事足りた筈であるから……。

「なるほどねえ。ムリノさんも、ここならすぐには警察にバレないと、その辺は、一応ちゃんと、それなりに考えているんですね」

「解ったような口を叩くんじゃあねえよ。テメエらには、俺の気持ちなんか、解るはずはねえ。せっかく軌道に乗り始めた仕事が、バブル崩壊のおかげでガタ減りよ。店は閉じなくちゃあならねえ、借金を返すアテもねえ。急に俺の肩に、重石が十個も二十個もブラ下がった気分だな。あんなバブルのハジケは、誰にだつて予測なんか出来はしねえよ、チクシヨウ」

「だからつて、仕事しないで飲んだくれて。勉強なんて、ある意味、逃げ路じゃないか」

「い、異議あり。逃げ路なんかじゃ、ねえ」

「何が、異議あり、よ。あんた、あんな荒れ放題は、ないだろ。わたし、だから、あんたの前から消えたのよ」

「テメエが消えて、何が変わったってんだ。いいこと、なんか何もねえよ。笑っちゃうぜ。あの時は……。女房には逃げられる、その上、テメエの店もなくなっちゃう。俺はなあ、俺は……」

酒が入っていたせいもあるのだろうが、村野は確かに、泣いて、いた。

「運というモンなのよ、それも」

「社会現象だったんでしよう、バブルつて。ムリノさんだけが大変だった訳でもないでしょう？」

村野は、そんな智美にも怒鳴らなかつた。

「滅らさず口を叩きやがつて。俺はなあ、ムリノじゃねえつてんだ」

「今ならまだ、間に合うわよ。こんな誘拐人さらいなんか、やめにして、自首しなさいよ。自首しないまでも、この娘を帰すのよ。あんたねえ、まっとうな人生が一番よ」

まっとうな人生を、何度作り上げようとしたのか解らない。しかし、どうしても行き着くところには必ずカベがあり、そこを乗り切れぬまま、ご破算となってしまうのだ。そんな自分の人生に決着をつけようと、村野は、よせばいいのに今回は、一攫千金の博打綱渡りを夢見てしまったのだ。

「言わせておけば……。まっとうな、人生だと？　じよ、冗談は、テメエの顔と大根足だけにしてくれよ」

洋子は、自分のジーパン姿の太股を見下ろし、慌てて、近くに放つてあったエプロンで覆い隠した。

*

*

話が途切れ、一段落、となった。洋子も智美も、村野に対して試みていた説得が、何も進捗し

ていないことに疲れ、呆れ、情けなく思い、さらには、これから先に生じるであろう、恐らく芳しくはない結末を想像して、ため息していた。

そんな時突然、洋子が再び、ハミングで童謡を歌い始めた。智美も良く知っていた童謡だったので、合わせてハミングして、まるでアカペラのようになる。二人とも、うまかった。そして、それを聞いていた村野も、実は合わせて歌いかけたのだが、そこは、バリバリ現役の身代金誘拐人質犯としてのプライドが、邪魔をした。

「上手ですねえ、洋子さん」

智美は、思った通りに評価した。

「それでも小学校の時『勝ち抜き小学生熱唱バトル』に出演したことがあるんだから」

智美は、その、十年ほど前まで続いていた長寿番組を、見た覚えがあった。シロウトの小学生を募集して歌を披露させる。それを真面目に作曲家や歌手が批評し採点し、優勝者を決める。実にシンプルで他愛のない単純な内容。しかし、そんな、尤もらしく子供の歌を評価する部分が、一般視聴者に受けて、長寿番組の一翼を担っていた。ただ現実には、歌の上手な者を子供時代からスカウトして芸能界に引き入れる為の、導入口の役割だったことは否めないのだが……。

「確か、あれは、クジテレビの……」

智美は思い出し思い出し、そう言った。ところが突然、そんな智美に、何故か村野がコマコマと……。

「いいや、あれは、ネオンテレビだったはずだ」

元出演者で、この言い争いの原因を作った洋子までもが……。

「絶対に、クジテレビよ」

「異議あり。あれは、ネオン……」

ずっと、続きそうだった。

「どっちでもいいでしょう」

智美が、言い放った。それを不服に思ったのか、洋子がさらに付け加える。

「インスタントラーメンを、まとめて六カ月分も貰ったのよ」

そう言いながらも、洋子は、自分の体型を自分自身でジロジロ見下ろしながら、気にしている。

「こういう時にはよく、警察の取調室では、容疑者の心の琴線に触れるような言葉を、語りかけるんだそうです」

「キンに触れ……。バ、馬鹿言っちゃあいけねえ。そんなこと、さすがに、本物の取り調べじゃあ……。取り調べで行き詰まったら、やるのかなあ……。ドウジマの話には、そんな事案は、カケラも出てこなかったぞ」

「ドウジマさんて、誰なんですか」

「な、なあに。ちょっとした、友人だ」

「何言ってるんだい。この男の周囲には、ロクな奴は、いないんだから」

洋子のその言葉に、シヤクに触った村野が、大きい声を出した。

「ドウジマはなあ、皆に物を教えてたんだぞ。先生、先生、つて呼ばれてよお」

「先生、ですか……」

「あんだねえ、黒薔薇ちゃん。この男にダメされちゃ、いけないよ」

それまでの痛い経験が、洋子の脳裏を過った。そんな訳、絶対にない、と。

「あの……、ムリノさん。質問、いいでしょうか」

「質問、か。手短かに、済ませろよ」

「これは、どなたにも伺う、一般的、形式的な質問なんです……」

またまた始まったと、村野はうんざりしてやり過ごした。

一方の智美の方は、真面目に確かめたい様子だった。洋子が言うように、本当に嘘八百を、村野が口走っているのか。それとも、真摯に真実を語っているのか、を……。

「そのドウジマさんて、何を教えていたんですか。それに、どうして、警察の取り調べの様子を知っているんですか」

すぐに答えようとして、村野は一瞬の躊躇を示した。するとすかさず、洋子が、ホラやっばり、と、両手を振ってソツポを向いた。そして、それに触発されて、村野は、智美の質問に、嘘ではない、と、答え出した。

「お客様にお金を出資していただく方法を、自分の舎弟分達に、解説していただんだよ」

「舎弟分……。出資の解説……」

「ちゃんとあいつは、解説書も自前で作ってたんだ。状況別に作ってた。重要ポイント。相手は七十歳以上がベスト。子供と同居していない者を選んで電話する。子供が出来るだけ遠方に住んでいるケースを選ぶ。そして、注意その一。子供が交通事故の加害者になったと連絡する場合。注意その二。子供が拉致されそうになっていると連絡する場合。注意その三。子供が通りがかりに難癖つけられ、インネンをつけられていると、連絡する場合……」

洋子は聞いていて、やっぱりと、首を横に振っていた。智美にも、だいたいの見当が、ついた。

「あんなねえ。いい加減にしなさいよ」

「電話の場合には、言葉の抑揚を大げさにしなくては、緊張感が伝わらない」

「あんな！」

「下調べの際、みすばらしい門構えの方が、意外とタメ込んでいる場合が多い」

我慢出来なくなつて、洋子が怒鳴った。

「それって、あんな。完璧な振り込め詐欺だろ。……ったく」

「ということは、そのドウジマさんという人は、犯行の口を、皆に、授業で手ほどきしていたってことですか」

「犯行方法じゃあねえぞ。如何にして、クロの線までギリギリのグレイゾーンで仕事するか」

て、一種の研究だよ」

「何が、なあにが、研究だい」

「物は、言いようですね」

「俺も何度か、教室で聞いたことがある。いやあ。あいつ、黒板使って、真面目に講義してたんだがなあ。警察に事情聴取されて、今じゃ、その名残りもねえって、話だ」

「当り前だろ、そんな、振り込め詐欺養成学校なんて。……ったく」

洋子にとつては、この上なくバカバカしい事柄であった。懲りずに村野が、相変わらず、犯罪スレスレの現場に、今まで居座っていた、ということを自供しただけのことだ。なまじ法律をかじっている村野が、監修役をしていた可能性すらある。

しかし、しかるに、さはさりながら、智美は、そんな話の内容であるにもかかわらず、少しだけ、心が穏やかになっていた。村野は……、嘘は、ついでには、いなかった……。

「それで、ムリノさんは、犯行を実行したことは、あるんですか」

「いや……。オ、俺は、やつちやいねえ」

まるで、取調べの容疑者みたいな話し方を村野がするので、智美は笑いをカミ殺した。一方の洋子は、半信半疑だったので、ブスツと怖い顔で、村野を睨みつけていたが、智美は信じてもいい、と思つてうなずいた。

「やっつてないとしたら、この男、ノミの心臓だからね。それで、やるのをとどまったんだわ。ノ

ミの寸留めよ」

「い、異議あり。そうじゃ、ねえ」

否定した村野の表情は、真剣、真面目、そのものだった。

「それじゃ、どうしてなんだい。あんたが詐欺に手を染めなかったのは」

「ドウジマが事情聴取されて、学校がなくなっちまって、最後まで振り込め講義が聞けなかったからな。確か、講座十五回完結だったのに、たった三回しか、出席出来なかった。これじゃあ、犯行に及ぶだけの資格がないと、思ったし……」

「あの……。そういう問題じゃないと思うんですが……」

「情けない。そんなことだと、思ってたわ」

少し問題ありだな、と、智美は感じていた。ドウジマ先生の講義を全部聞いていたら、村野は犯行に及んでいた、ということになるからだ。そして、智美は、この話の原点である、心の琴線、という文言を思い起こした。何か、遠い遠い昔の出来事を掘り起こしたような、感覚であった。

「話を、取調べの時の、心の琴線に戻しましょうよ」

ああ、そうだった、と、洋子も村野も、思い起こしたように、顔を見合わせた。そんな二人の前で、智美は大きい声で話した。

「琴線、です。心の、琴線」

「そうよ。キンセンよ、キンセン。お金のことに決まってるじゃない」

智美は、ガクツとコケそうになったが、一方で村野は、洋子のその言葉を、真面目に聞いていた。

「そうだったのか。なるほどねえ……。カネのことか」

智美は、呆氣にとられた。

「あ、あの……。キンとかキンセンには、この際、そんなにあんまりコマ、コマとは、こだわらなくてもいいんです」

「黒薔薇ちゃん。あんた、ヤケに、詳しくじゃないか」

「去年、犯罪心理学の単位を取ったんです。だから、少しだけ」

これは本物だと、洋子も村野も、興味深そうに、顔を智美に向けた。

「琴線に触れるというのは、刑事さんが、犯人の心にしみる話をして、自供しやすくする、っていうことです」

智美がそういうと、洋子は、パンと一度、手を叩いた後に……。

「それじゃあ、そのキンセンとやらをやってみようじゃないか。この男が、これ以上何かやらかすと、トバッチリが全部、こっちに来ちまうもの」

「ウルセエんだよ、トシマ女は」

智美は、洋子の賛同を得て、ますます凶に乗り、やる気になった。

「それじゃ、歌を使う方式で」

「何よ、歌って」

「心理懐柔方法。要するに、心を揺さぶって相手に事実を言わせる、という方法です」

「へえ」

洋子も村野も感心していたが、村野は何でもいいから感心しておけ、という、どちらかと言えば、ヤケツパチの態度であった。

『かあさんのうた』って、洋子さん、歌えますか」

「ええ。歌えるわよ」

洋子は、待つてましたとばかりに、イソイソと歌い始めた。そして、途中止めして、何を思ったのか、店用ではなく、自宅用のカラオケセットのスイッチを入れて、マイクを通して歌えるようにセットした。その際、ハウリングが何度か生じて、村野も智美も、顔をしかめた。しかし、そんなことは些細なこととお構いなしに、『あ、あ、あ、テスト、テスト』とか言いながらマイクテストした後、洋子は再び、『かあさんの歌』を続け出した。結構上手なので、智美は、幼い頃のテレビ出演は本当だったんだわと、改めて洋子を見直していた。そして、そんな独演会が一段落してから……。

「洋子さん。もう少し、ゆっくりと小さめに歌ってくださいませんか？」

「ダメエ、外に聞こえないよう、うまく手配しろよ」

「解ったわ。久しぶりよ。お店の仕事以外で、マイクを通して、この喉を披露するのも」

マイクのボリュウムが、だいぶ下がった。そして、かなり上手な、洋子の「かあさんのうた」が続き、途中からハミングに変わった。それに合わせて、今度は智美が、村野に、朗読するように、説得するように、語りかける。

「裕行。元気かい。仕事の調子は、どうなんだい？ かあちゃんも、毎日一生懸命に、頑張っているよ」

わざとシワガれた声で喋る智美の台詞を、村野は、バカバカしいと思いつつも、表面はシオらしく聞いていた。

「お前は頑張り屋だったから……、少しでも豊かな暮しが出来ればと、毎朝、新聞配達をして、かあちゃんを助けてくれたよねえ。あんたに揉んで貰った肩が、よおくほぐれて気持ち良かった……」

ちょうどタイミングよく、洋子が声を震わせて、泣きを誘ったものだから、聞いていた村野もとうとう、鼻をグシグシグシユさせ始めた。偶然だが、村野は短い間ではあったが、兄の新聞配達を手伝ったことがあった。その際の、夜明けの放射冷却による、ヒンヤリとした外気を思い出していたのだ。

「裕行。泣いたりしちゃ駄目だよ。つらい時ほど、頑張らなくっちゃ……。かあちゃん、いつも見ているよ。どんなに貧乏したって、死ぬことを思えば、辛くはないさ。何とかなるんだから」

村野は、ますます昔を思い出し、本泣きになって来た。父親は、早くに病死していた。だから、山村の貧農で育った村野には、実際、母親の言葉が最高のプレゼントだったのだ。物はなくても、それだけで幸せになっていた。村を捨て、家を捨て、北海道の廢舎の門を叩いた後、競馬の騎手になって以来、何とかメインレースに出場出来るまでに出世してから戻ろうと考えていたが、そうなる前から忙しさがハンパではなくなり、とうとう田舎には帰る機会を逸してしまった。騎手引退後は、再び錦を飾れるようになるまでは、自ら背を向けた村には帰れないと、頑張っていた。それが、どんどん破綻を生じて、とうとう人質誘拐犯人になるといって、転落の人生の渦に巻き込まれてしまった……。

こんな風に、村の少年時代を思い出させやがって、と、村野は、智美を憎らしくさえ思った。しかしその一方で、智美と洋子が作り出した、心洗われるような時空間に、心地よさが存在していたのも事実だった。

と、そんな時……。曲に乗せた、智美のしわがれた作り声が、響いて……。

「辛くつても、ひもじくつても、決して、決して、人さらいや誘拐人質は、やつちや駄目だよ」
そんな智美の台詞に、様子がおかしいなど反応した村野の表情が、歌っている洋子の眼にも、はつきりと解った。

「裕行が誘拐だなんて、シャレにもならないんだから」

村野の心地よい時間と空間がフツ飛んで、現実に戻された。

「テ、テメエ……。ウルセエ！」

その大声に、洋子が呼応して、歌をやめる。

「黙って聞いていりゃあ、いい気になりやがってよお」

村野は、折角の良い気分を、台無しにされ、本当にキレて、怒っていた。

「コンサート風で、あんた、とつても良い感じだったじゃないのさ」

智美も同調した。

「何か、ジーンと、心に込み上げて来る物が、ありましたよねえ」

ノウノウとそう言う智美に、村野はますます怒りが増した。

「何が、裕行が誘拐だ。テメエ、黒薔薇。俺をナメてるのか」

「ナメるだなんて、そんな汚い」

「俺をオチヨクルんじゃあねえぞ。俺は、テメエらの、コン、コン、コン……」

「何、言ってるのよ。酔っちゃって、哀れだねえ。それを言うなら、コンサートよ」

「それだ。そのコンビナートを聞いているうちに、気持ちが固まった」

もういいわと、洋子も智美も、その「コンビナート」を訂正するのもバカバカしいと、やり過ぎた。

「ムリノさんが、気持ちが固まったって言うことは、キンセンの効果があつたということですね」

その点については、まだ解らないわ、と、今度は洋子が村野を問いつめた。

「それであんた、何時、自首するのさ」

「自首されましたあかつきには、拘留中には差し入れもきちんと定期的にしますから。タクアン付きのカツドン、並ぐらいは」

智美のその言葉に、村野は、ガクツとコケた。

「ふざけるんじや、ねえ。そもそも、カツドンたあ、取り調べ室で食うモンだろ」

「詳しいですね、ムリノさん」

「ウルセエ。人質のテメエが、どうして俺に、差し入れなんかするんだよ。俺はなあ、自首するなんて、一言も言っちゃあいねえ」

ああ、やっぱり、と、洋子は手を拡げながら嘆くように問いつめる。

「それじゃあ、何の気持ちも固まったって、言うのよ」

「次の脅迫電話を掛ける気持ちが固まったって、言ってるんだよ」

洋子の嘆く様子が、智美の目隠しの下の瞳にも伝わって来た。

「逆効果だったようですね」

「あんたねえ、いい加減にしたら」

「ウルセエ。俺はなあ、泣く子も黙る、人さらいだぞ」

洋子も、智美も、呆れていた。

「そりゃ、漫才師には見えないわ」

「根本的に、本物の、真面目で計画的な人質誘拐犯人には、思えませんよ」

「そこまで言われて、さすがの村野も、搾り出すような低音で、一言、言い放った。

「ウルセエ！」

その言葉には、スゴミが、あつた……。

「す、す、すみません」

「……つたく。何が、真面目な人質誘拐犯人だよ。人さらに、真面目も不真面目も、ねえってんだ」

村野はさらに、そう言い、怒った鬼瓦の表情で、女二人にニジリ寄った。そんな雰囲気を知ってか知らぬか、智美が質した。

「そ、それじゃ、何て電話するんですか。お金もまだ、カネアリ公園に、取りに行っていないんですよ」

村野は、腕時計を見た。

「もう、約束の時間には、間に合わねえ」

「打つ手なんか、何もないんだろ、あんた」

「いや、一つだけ、打つ手がある」

「右手ですか、左手ですか」

智美のチャカシとも取られかねない、その巧妙なタイミング言葉に、村野も洋子もズッコケうになった。智美は、とにかく深刻にしたくはなかったのだ。視点を少しでも焦点からズラしておけば、村野がまだ、現金強奪に関して未遂で済ましてくれるかも知れない、と、期待を抱いていた。

「ふざけるなよ。あのなあ、黒薔薇。気持ちが定まらねえんだよ、おまえのチャカシで。ちょうど相撲でな、仕切ってる最中に、クスグラしている気分なんだよ、この野郎。テメエは頼むから、黙っていてくれないか」

「それはどう考えても、無理ですよ。私だって、ずっと目隠しされてるし。喋ってなきや、寂しいですよ。それに、右腕は痛いし」

「右腕って、怪我？」

「たまに痛むんですよ。小さい頃の古傷で」

そう言う智美の肩を、洋子が横から優しく抱いて、右腕をさすってやり、村野を智美の代わりに睨み付けた。

「仕方がない。こうなったらこの、黒薔薇小娘の声を録音して、それをマスコミに流す。カネは、黒薔薇の口座に入金させる」

「私の口座に？」

またまたまた、と、洋子は首を横に振った。

「そんなの、うまく行くわけ、ないわよ」

「グズグズ言ってる暇は、ねえ」

村野が、ヨイシヨと、立ち上がった。ゴロゴロ横になっっているばかりで、なかなか行動に移らなかった村野が、とうとう着替え出した。そして、すでにスイッチを切つてある洋子のカラオケセットで、録音が可能かどうかを調べ始めた。

洋子は、もう止まらないのかも知れないな、と、村野をそのまま自由にさせた。この時点で、村野に罪がかかっても仕方がない、と、諦めたのだ。智美の肩を抱く洋子の手の力が、強くなる。それを感じて、智美も洋子の気持ちを汲んだ様子だ。ここまで来たら、もう仕方がない、なるようになれ、と。

*

*

第三章 意外な強奪プラン

繁華街のスクランブル交差点には、蟻のように列をなして歩く、多数の人々の流れが出来上がっていた。そんな町中にそびえるビル of 側面に、大きな映像ボードがあり、そこでニュースが配信されている。普段は様々なCMが流れているのだが、天気予報や臨時ニュースがあると、即座に切り替えられるのだ。

そんな、交差点の映像ボードに、銭山智美の顔写真が、大きく写し出されている。どうやら、銭山智美の家族が、警察やマスコミに提供したものである。そして、それとともに、智美の録音声が、会話文として生々しく記されている。そのカギカッコは、何処となく、わざとらしく、作り物に見える。

「きゃー、いやあー。あーれー、助けてー。あーれー、助けてー」

異様な会話文に、立ち止まった通行人達は、呆れて、そのボードに写し出された、智美の写真を見上げていた。

一方、利山洋子が経営する「スナック・洋子」の店の二階部分に潜伏する、村野裕行と銭山智美も、洋子とともに、とうとう町中に流れ出てしまったこの事件を、報道ニュースという形で、

はっきりと把握した。テレビでは、村野が録音して送った智美の叫び声が、繰り返し繰り返して流されている。そして、いつもの真面目な女性アナウンサーが、よりをかけて一層、真面目に報道している。

※

「この声は、銭山智美さんの声に間違いないということが解りましたが、心理学者の班陣満教授の分析では、智美さんの声には恐怖心が滲み出ている反面、冷静さも感じ取られるという見解で、捜査当局では、犯人の次の出方に注目しています。尚、犯人は、カネアリ公園に身代金を置くように要求して来たものの、取りに現れることもなく、今度は、人質になっていると考えられる、銭山智美さん本人の銀行口座に現金を振り込むようにと、突然、要求を変えて来ました。このように行き当たりバッタリで計画もズサンな犯人の行動に対して、捜査当局では、愉快犯の可能性も捨て切れないとして、捜査を続けております。班陣満教授は、今回の一連の犯行の山口についての感想を記者会見で尋ねられ、一言、『チャチだ』と語りました。次に……」

※

その会見を見ていて、頭に来た村野は、テレビのスイッチを無造作に切った。

「ふざけやがって。何が、チャチ、だよ。あの、班陣満とか言う学者野郎。会ったら、ただじゃおかねえぞ」

「でも班陣満先生は、心理学の分野では、それはそれは、有名な学者先生なんです。私の大学で

も非常勤で教えています。おっしやっっていることが、まるで嘘や間違いだとは、思えませんが……」

智美がそう言うので、村野はますます頭に来た。

「それじゃあ何か？ テメエ、黒薔薇。あれほどうまく悲鳴を上げると言ったのに、テメエは冷静に悲鳴を上げていたのか。ええ？」

「うまく演技したつもりなんですけれど……。アガッちゃって」

村野も洋子も、それを聞いて、コケそうになってしまった。

「バカタレが」

「もういいから、そんなこと。それより、この娘の口座に、五千万円が振り込まれるのよ。どうするのよ、あんた」

「今日は遅いし、明日の振込だろ」

洋子は、壁に掛けてある、十二羽の鳥の姿が刷り込んである時計を見上げた。

「そうだねえ、もう十一時だし。振込の手続きは出来ても、お金が入るのは明日よ」

「でもたぶん、私の口座にはもう、お金はあると思いますよ」

村野が、ジレた。

「テメエ、人の話はちゃんと聞け。午後の十一時だぞ。こんな時間に、どうやったら何千万もの振込が出来るんだよ」

「とつくに、振り込まれているんです」

村野と洋子が、ええつ、と、ダブルで奇声を発した。

「テ、テメエ、今、何て言った？」

「もう、お金は、あるんです」

洋子が、身乗り出した。

「どういうこと？」

「実は、私の学費と生活費に当てて、月々百万円ずつ振り込まれてたんです。それがたまりにたまつて、三千万円位には、なつてるはずなんです」

村野は、話が違つじやないかと慌てた。

「テ、テメエ。積み立て預金が、五万九千円だつて、言つてたじゃねえか」

天国と地獄ほどの、えらい違いだつた。

「そうですよ。積み立て郵便定額預金は、元金五万九千円。それプラス利息分になつてゐるはずです。利率は、何パーセントだつたか忘れたけど……。低金利だから、あんまり増えずに、つらいんだなあ、これが」

「ええい。細かいことはどうでもいい」

一方の洋子は、心を落ち着けて、智美にもう一度、質した。

「三千万円は、どういうことなのかつて、訊いてるのよ、黒薔薇ちゃん」

「おい、黒薔薇。納得の行く説明を、して貰おうか」

だまされているような気がして、村野はやけに粋がって、偉そうに迫った。

「三千万円は、親が勝手に、私名義の日本フゴウ銀行の総合預金口座に振り込んでいて、私、そのお金を、おろしたこともないし……。だからそもそも、私とは全く関係ないお金なんですよ」

「テメエ。親や事務局はケチで、儉約家だって言ってたじゃねえか」

「そうなんですが……。私がわざと遠くにアパート住まいしているでしょう。だから、私の生活費だけには、大アマだったんですよ、これがまた」

親にとっては、目に入れても痛くないほどの溺愛娘、ということなのだろうか。呆れるばかりの、村野……。ため息をついた。

「テメエ、黒薔薇。俺はなあ、趣味や遊びで人さらいをやってるんじゃないぞ」

「タイガイの性質誘拐犯は、そうだと思いますが……」

平然とそう言う智美に、村野は一層、怒った。しかし、この銭山智美という小娘には、何故だろうか、何処かに憎めない要素があり、力を入れそびれてしまう……。そんな感覚も、同時に持ち合わせざるを得ないので。

「テメエなあ。どうして最初から、現金があるって言わなかったんだ。バカタレが」

「だって……」

「だって、じゃ、ねえ」

飄々としている智美が、突然悲しい表情を口元に示して俯いた。村野は、それを見て、何かま
ずいことを言ったかかと、ガラにもなく反省してしまった。そしてその後、どうして俺の方が、
反省しなくちゃならないんだと、自分の心を前向きに締め直した。すると……。

「私にだって、さらわれた方にだって、プライドってものがありますから」

「ダメエ。裏井戸？ 裏井戸、だと？」

洋子は、そんな村野を完全に無視して……。

「何よ、プライドって」

智美は、声を大にして、宣言するように、話し始めた。

「私は、私自身の力で、学生生活を送ったり、就職活動して、行きたいんです」

「そうじゃなかったの、あんたは？」

その時点で、村野はやっと、自分が、プライドを裏井戸に聞き間違ったと理解した。

「今までは肝心な時に両親や親類がシャシャリ出て来て、勝手に私の道を決めてしまったの。
いろいろ事情があつて……」

「そうだったの」

利山洋子は、施設の育ちで、親の顔を全く、知らなかった。だから、智美のように、すべてを
管理されるわずらわしさは知らないし、理解出来なかった。どちらかと言えば、恐らく智美のワ

ガママだわ、とさえ感じていた。しかし、その場では、さも自分が、智美の立場を充分に理解出来ているように振舞った。それは多分、洋子のプライドから発したものに、違いなかった。

「私、とにかく自力で暮らさなくちゃと、大学入学以来、アパートを借り親元を離れて、自分の生活費は自分で稼ぐことに決めたんです」

洋子は満足に、高校さえ出ていなかった。そして近年、テレビでたまたま見つけた、ポルトガル語口座を続けて見ていることだけが、自分が接した唯一の勉強だった。青春時代に当たる十代後半や二十代前半は、勉強どころではない波乱万丈だったのだ。それだけに智美がうらやましかつたが、それを言葉の上に表わすのだけはやめた。悲しみを思い出すだけだと感じたからだ。

「それじゃあ、黒薔薇ちゃんは、親御さんの仕送りには、まったく手をつけなかったって言うの」
智美が、うなずいた。一方で、そんなことは出来るはずがない、と、村野は探るように智美を攻めた。

「それじゃあ、生活費は、どうやって工面していたんだよ。ええ？」

智美は、大学入学以来、正確に言う、大学受験合格以来の自分のアルバイト人生を、頭に巡らせていた。大学は黒薔薇女子大への推薦入学が決まったので、高校三年の十月には、すでに合格が内定していた。つまり、バイトの一部には、高校時代から続けていたものもあった。家庭教師。放送局でのバイト。さらには、デパートや映画館での自分のバイト姿が、脳裏に蘇る。それら一つ一つに、とにかく、大学生の智美は熱中していた……。

「家庭教師のホオズキクラブで国語を教えたり……。MHBラジオのニュース原稿の清書をしたり……。あれって、元の字がものすごい。まるでどこか別の国の文字みたいな、ナグリ書き……」

「テメエ、黒薔薇。余計なことは、言うんじゃないわ」

「その他にだって、マルカクデパートのワゴンセールや屋上のぬいぐるみとか……。そうだ。花竹映画第一シネマ館のモギリ」

最近の学生は、一体何を考えているのだろうか、そんなに勉強の機会も多くはなかったし好きでもなかった村野でさえも、智美の言葉を聞きながら、ウンザリ辟易していた。

「もう……。もう、いい」

「まだまだあるのに……」

「黒薔薇、テメエなあ、一体何を考えてるんだ。あんた、大学生だろうが。少しは勉強でもしろや」

「そうだよ。名門で有名な黒薔薇女子大にいるんだろ。本当に少しは勉強しなくっちゃ」

言葉にこそ出しはしなかったが、智美の持つ女子大生という身分は、勉強する環境になかった洋子には、まことにもって羨ましい立場であった。村野は子供時代、勉強する気など更々なかったのに、社会人になってから、様々な事情があつて、必要に迫られ、法律を独学で学んだ。一方の洋子は、ずっと本格的な勉強をしたくても、生活優先でその機会などなかなか与えられること

なく、そんな状況がいまだに続いている。楽しみといえ、テレビでたまたま見つけた、語学講座でのささやかな勉強だ。無気力な勉強と、ささやかだが自主的な勉強では、大きな隔たり、極端な違いがあった。

「テメエなあ、人さらいに説教される人質がなあ、この世の中に、いるか？」

これでもかこれでもかと、それまでなかなか強気に押し込めなかつた村野が、一気に智美を攻め立てた。しかし、そんな村野に、智美は、忘れかけていた自分の今までの、表向きの人生、小卒にはまった型式通りの人生を、はつきりと思いつ出した。

「育ての親みたいなこと、言わないでよ！」

村野は、智美の剣幕に驚いた。そして、その時、「育ての親」と敢えて智美が言ったことが、やけに印象に残った。それは、智美としては、悲しみを暗喩する剣幕だった。両親には、お金以外のことで親らしく面倒を見て貰ったことなど、指で数える位しかないわ、と……。そんな気持ち解らなくはないものの、村野にも村野の立場がある。村野は自分を奮い立たせて、怒るフリをした。

「テ、テメエなあ、ふざけるんじゃないあ、ねえぞ。俺は泣く子も黙る、人さらいだぞ。遊びや趣味で、テメエを誘拐してる訳じゃあねえんだ」

「私だって、私だって、遊んでる訳じゃあないのよ」

そういう智美は、目隠しで隠された瞳で、泣いていた。

「あんたねえ、言い過ぎよ。あんまりこの娘を、泣かすモンじゃないよ」

利山洋子はそう言うものの、逆に村野は、この小娘には同情するとヤバイ、と、自分を戒めていた。

「泣かすなだど？ こいつは人質だぞ、バカタレが。……それじゃあ俺は、どうしたらいいんだよ。ずっと、こいつのお守でもしてろって言うのかよ。ふざけるんじゃ、ねえ」

村野がそう言った途端、智美の大きな泣き声が部屋に響いた。村野は焦った。

「ウルセエ！」

搾り出すような村野の声を聞いて、智美にも、村野の立場が伝わった。

「テメエの声が外に洩れるだろうが」

「す、すみません、ムリノさん」

また、トボケやがって、と、村野は思った。銭山智美は、危ない。思いの他、打たれ強く、見た目で判断するのは危険だ。ダメされる。それが、村野の智美に対する評価だった。

「……つたく。ウルセエんだよ。俺は、ムリノだ」

「ムリノさん。これだけは、解ってください。お金があつたつて、心が豊かにならないこともあるのよ。幸せつて、自分の手で作り上げて行くものでしょう？」

「そりゃ、間違いなく、そうだが……」

「何時だつて幸せは、周囲の人にあてがわれて作り出すものじゃあ、ないでしょう。自分の努力

で生み出すものでしょう？」

村野は、智美の言うことも、一理ある、と感じ、残っていたコップ酒を飲み干した。

「だけだよお。自分だけの力なんて、たかが知れてるつてんだよお。甘くはねえんだぞ、世の中はよお」

そんな村野を見ていた洋子は、これ以上村野に飲ませては、ロクなことはないと思ったのか、残りのコップ酒と酒ビンを、素早くテーブルから取り去って、自分の背後に隠した。

「確かに、人のこしらえた線路に沿って幸せを見つけたとしたつてさ、十分に満足は出来ないかも知れないわね」

「しかしよお。どう考えても、目の前に大金があるのに、使わねえつて手立ては、ぜぜ、絶対に、ねえぞ」

そう言いながら、村野は洋子の背後の酒ビンに手を伸ばそうとしたが、それを洋子は平手でピシヤリと封じた。

「そりゃ本人の考え方の問題よ。だいたいねえ、他人から幸せを盗むなんて、邪道も邪道も、どうしてそんな考えが頭に浮かんで来るのか、そんなことをやっちゃまうヤツの顔が見たいモンだねえ……」

「おい、トシマ女」

そう言いながら、村野は、酒ビンではなく、洋子のカップ酒を、今度は無理矢理、奪い取った。

「私は、トシヤマ・ヨウコよ」

「どうでもいい。テメエ、当てつけなんか言いやがって。そんなことが言える身分なのかよお。ふざけるんじゃないぞ」

村野は、コップ酒を、再びあおった。

「人さらいなんかするからいけないのよ」

「うるせえ。それもこれも、この黒薔薇小娘が、日本フゴウ銀行の三千万円を黙ってたから、こういうことになっちまったんだ」

「す、すみません、ムリノさん」

「テメエが最初から話していれば、俺はカネアリ公園のゴミ箱に金を入れておけなんて、切羽詰った要求は、出さなかつたんだ」

そう言いながらも、ゴミ箱に詰められた金は、本物の札束だつたんだろうかなどと、村野は頭の中に、積み重なつた札束を思い描きながら考えていた。

「そうですね。心理学の班陣満教授に、『チャチだ』なんて、言われなくても済んでたですよね」ひとごとみたいに言う智美に、村野はムツとしたが、そこは酒の匂いに気を紛らせ、我慢した。

「もう、日本中にニュースで知れ渡っちゃつてるわよ。あんたねえ、どうするのよ、これから」そのように急に振られても、村野には会心の方策なんて、浮かばなかつた。

「本当に、どうしたらいいんだか……」

「あんな、私に気を遣って親が振り込んだ、日本フゴウ銀行のお金なんて、ムリノさんにノシ付けて全部差し上げますから、とにかく私を、元の生活に戻して欲しい」

「バカ野郎。通帳はテメエのアパートだろ。そんなこと、出来れば、とつくにそうしている」
珍しく、村野と意見が一致した、と、洋子は考えていた。

「そうだよ。いずれにしたって、今、お金を引き出すのは、危ないわ」

それに後押しされたかのように、村野の勢いが増した。

「まったく、こんな小娘の世話係は、もうたくさんだ」

そして、今度はそれを聞いた智美が、負けちゃいられないと、感情を込めた。

「そんな……。もうたくさんだ、なんて、ひどい！」

「そうだよ。あなたは女に対して、少し接し方がキツイのよ」

洋子は、今度は、智美の味方をした。智美を泣かせたくはなかったのだ。自分の青春時代や、男達に引っかけ回された不毛の時代を連想させるからだ。智美の目に当ててあつた左側のガムテープの下、アイマスクの隙間から、とうとう雫が流れ落ちた。洋子はそれを優しく拭いた。

と、そんな時……。玄関のドアを激しく叩く音が響いた。村野と洋子だけでなく、何故か智美も、ピンと背筋を張った。引き続き、静かな二階の部屋に、一階店舗の玄関ドア外から、こもつた男の音がする。

「トシマさん、トシマさん」

それを聞いた村野は……。

「ヤバイ！ サツだ」

「わたしは、トシヤマだつていうのよ」

洋子は、不満だった。

「そんなことは、どうでもいいから、店に行つて出るよ！」

「出て、どうすんのよ」

身勝手な村野の小声に、洋子は憤慨した。そして、動こうとしない洋子を前にして、村野が息巻いた。

「早くしろい！」

「わ、解つたわよ」

「適当にうまくやれよ。早くしねえと、裏口に回つて来るぞ。車、怪しまれちまう」

車が即、村野の潜伏を指し示す訳ではなかったが、探す者としては、ターゲットである村野の潜伏を疑う、大きな要因になる。そんなことを頭の中で考えたのか、智美までもが、小声で……。

「早く出た方が、いいですよ、洋子さん」

一方、村野が心配なのは、やはり智美の方だった。目隠ししているとはいえ、洋子が一階に降りた際に、村野は智美と一対一になる。それを智美が狙つて大声でも出されたら、一遍に、村野

は、拉致監禁罪での現行犯逮捕、となってしまうのだ。

「テメエ、黒薔薇。声を立てたりしたら、フトン蒸しにして尻をペンペンして、その後、天井から吊るして、ムチ打ちにするぞ」

包丁が再び、キラリと光った。智美には、その刃物の鋭さが、当てられた頬を伝って来た。そして、智美にとつては、村野のその時のセリフが、やけに真実味を帯びて来た。

「わ、解りました。静かにしています」

そして、村野は念のため、智美にはサルグツワをかませた。智美も従順であった。

一方、洋子は、ノックし続けられているドアに近づいて行った。ノックは執拗だ。

「どなたです？」

洋子の問いに、いささか作り声の様子で、わざと野太く聞こえるように腹から搾り出した、男の返事が聞こえた。

「手前は、ニコニコファイナンスの、カネダというモンだ」

「カネダさん……。ニコニコ……。何の、御用です？ 今夜はココ、休みなのよ」

カネダという男に、洋子は覚えがなかった。

「あなたの所に、村野裕行って、ケチな野郎は、来ていないかい？」

村野の関係なんだ、と、洋子は想像を巡らせた。村野が詐欺でも働いた相手先かも知れない、と。

「ムリノ……、いいえ、村野……。いないわよ」

その、言うなれば借金取りのカネダという男は、洋子の、村野はいないという返事に疑惑を抱き、ドア外から耳をつけたらしく、内部の様子を伺いつつ、洋子をさらに探ろうとしている気配だ。

「あなた、本当だろうな」

「ホントよ。あの人とは五年前に別れたきり音信不通よ。それよりどうしてあなたが、この私の居所を知ってるのよ。怪しいわね」

簡単に洋子の転居先が見破られていた。こんなことじゃ、警察にだつてすぐに、村野の潜伏先として、ここが捜査の対象に上がるだろう、と、洋子は暗澹たる思いだった。

「ヤツの部屋を差し押さえた時、あなたの名前と以前の住所が解つたんよ」

村野のウルトラドジめ、と、洋子は唇をかんだ。

「それで、私のことを聞き込んで、調べ出したのね」

「ヤツは何処にいるか、解らねえか」

「村野のことなんか、知らないわよ。あいつ、女なんて数え切れないほど、いるんだから。競馬場のある都道府県全部、調べなさいよ」

「あの野郎」

カネダは、村野がヤケに憎らしそうだ。

「何かやったの、あの人」

「借金を踏み倒して、消えてるんよ」

ああ、やっぱりと、洋子はそれほど驚かなかった。しかしここは、知らぬフリをしておかなくっちゃと、一芝居打つことにした。

「借金ねえ。……ったく。ホント、懲りないヤツだわ。アタシだつて、いくら飲み代を踏み倒さ
れることが」

「あいつに会ったら伝えてくれ」

カナダが、ヤケに素直に洋子のことを信じた。しかし、これには裏がある。恐らく、張り込み
でもして、村野の出入りがないかどうか確かめるつもりなんだわ、と洋子は確信していた。

「あいつに会うことはないと思うけど……。伝えるって、何を、伝えるのよ」

「利息だけでも支払ってくれ、と伝える。そうでないと、俺はフィリピン支店に飛ばされちま
う、ってな」

カナダの声は、取り立て屋には似合わぬほど、弱々しい泣き声だった。同情してドアを開けて
やるうかと思ったが、そこは状況を考え直して、自重した。

「フィリピンなら、いいじゃないの。明るいお国柄で、おめでとう」

そんな洋子を、慌ててカナダが制する。

「あ、あのなあ、俺はなあ、海外にまで出かけて、舞台上で恥は、さらしたくはねえ」

「舞台？ 何が、舞台なんだい？」

舞台がどうして出てくるのか、いささか洋子は頭をひねった。すると、ドア外から、本当に、トホホホと泣くカネダの声が伝わって来た。

「あなた、ニコニコファイナンスの社員なんでしょうが」

「そうだ。融資管理課のカネダ、だ」

「しつかりしなさいよ、しつかり」

取り立て屋としては、モロに弱腰で、その業務にふさわしい性格や言動であるとは、とても思えなかった。

「融資管理課が、どうしてフィリピンの舞台に、立つのさ」

カネダが、少し声を整えてから喋った。

「中小の金融業界にはなあ、リストラと、適切な配置転換が、つきものなんよ」

「リストラと、適切な、配置転換……。何よ、それ」

洋子がカネダの先輩の話を聞き出したところ、その先輩は、「適切な配置転換」で、国外に転勤させられた。そして、何と、取引先のレストランパブに外向する形で迎え入れられた。歓迎されたと思ったのは束の間。与えられた仕事は、ショータイムにタイムマツを持って両手でグルグル回しながら、竹の棒の下を潜り抜ける、あのリンボーダンスだったという。さらに最近になって新たに、刀とタイムマツと何故かリングを、お手玉みたいにグルグル回して、客から拍手喝采を浴

びているという。その先輩は、たまたまうまく「仕事」をこなして行けたから、地元の新聞にも紹介されたし現地で所帯を持って住み着けることにもなった。しかし、カネダには、そんな自信もないし、ダンスにも興味がない、というのだ。

「俺はなあ、リングはともかく、タイマツだけは、自信がねえんよ」

そう言つて、こちらから、もう帰つて、とか、急かさぬうちに、トホホホ、と去つて行く気配のカネダ。そんなカネダの気配に、洋子はある意味、同情していた。そんな状況にカネダを置いた元凶は、やはり、あの、村野だったのだ。

*

*

「あんた、カネダつて借金取りが、配置転換でタイマツ……」

洋子が居間に戻ると、智美しか目に入らなかつた。その智美も、再びかまされたサルグツワがきつかつたのか、ヒイヒイ言つている。洋子は引き続き、村野を探すべくあたりを見回した。

「あんた？ 警察じゃあなかつたのよ。ニコニコファイナンスだったわ。あんた！ 何処に行つたの？」

洋子は、洋服ダンスの中や、何故か引き出しの中まで探したが、無論、村野の姿は見つからない。そして、座っている智美がその間、ヤケに静かになつているのに気づき……。

「そうか。サルグツワ、か。また、サルグツワ、されたのかい」

そう言いながら洋子は、智美のサルグツワを外してやった。そして、右腕を痛がっていたのを

思い出し、すぐにロープを解いて、右手をさすってやった。

「ああ、苦しかった」

「あいつは、何処に行ったの？」

「それが、ムリノさんは……。『失敗した、行きたい所がある』って、言い出して……。たぶん、屋根づたいに、サツサと……」

懲りないヤツだわ、まだ何か企んでる、と洋子は、苦虫をかみ潰す思いだった。

「まさか、あいつ、今度は、銀行強盗？」

「それは、ないでしょう」

「そ、そうよねえ。あの度胸なしなもの」

もう、騒々しいトラブルには巻き込まれたくない、というのが、洋子の正直な気分であった。

「もう一度やって見るって、ムリノさん、言っていました」

「人さらいを？」

「それもないと、思いますよ」

智美は、サラッとかわした。

「それじゃ、何をやるっていうの？」

そんな洋子に、智美は感じていたことを率直に話した。

「人生を、もう一度、だと、思います」

「人生を？」

智美は、村野の声を思い出していた。良い声とは言えない掃除機のダミ声だったが、意外にイける、深い声だった。そんな村野が、智美の意見や質問に、いちいち取り合ってくれたので、智美には余計、印象深かったのだ。

「私が、『幸せは、周囲にあてがわれて作るものじゃない』って、言ったでしょう？」

智美のその言葉は、洋子も心に刻んでいた。

「覚えているわよ、それ。ジーンと来たわさ。さすがに黒薔薇女子大の心理学よ」

「ムリノさん、あの一言が利いた、って、出て行ったんです」

大学では、そんな言葉の勉強なんてしてはいないから、洋子の、「さすがに」という反応は少しズレていると智美は感じていた。しかし、実直に素直に、自分の考えを言葉に表わした、という部分が、洋子や村野の心に響く何かを残したのかしら、と、智美は満更でもなかった。

「黒薔薇ちゃんの、あの言葉が、心に染みたってか……」

「自分が一番やりたいことに、もう一度挑戦してみる気になったんでしょ」

智美は、自分に置き換えて考えていた。

「一番やりたいこと、って……、何だろ」

「会社の立て直しですか？」

「解らないわ。あいつがやり直すたって、どこかで路頭に迷って、飢え死にするのがオチじゃ

ないの？」

洋子は、村野の今までをつぶさに観察して来たので、智美のように肯定的な考えには、なかなか及ばなかった。何一つうまく出来ない村野……。そんな印象がつきまとった。

「いつの日かムリノさんが帰って来たら、洋子さん、暖かく迎えてあげてください」
どうしてそんなことを智美が言うのか、洋子には不可思議だった。

「どうしてあんなヤツを？ あんたにだって、こんなひどいことをしたヤツよ」
智美の腕のロープ跡をさすってやりながら、洋子は言った。

「だけど……」

やっぱり黒薔薇は、村野の普段を見てないから、こんなことを言えるんだわ。そんなふうに洋子は、智美を心の内で冷笑していた。何も知らないクセに、と。

「男なんて、まっぴらよ。みな大嘘ばかり平気で口にしてさ。自分勝手に乱暴で」

「洋子さん……。そんなこと……」

洋子は、洗いざらいぶちまけたくなった。

「嘘やダメシで、私は、今も一人。オトコが信じられないの」

「そんなこと、言わないで」

「私はねえ、私は、ねえ」

洋子の言葉が、智美をさらに冷たく刺した。同時に洋子は、智美には人生の恥部、人生の暗い

景色は、何一つ見えていないのではないかと、感じていた。そして、見えない、というところから、智美の顔に掛かる目隠しが連想された。

「そうだ。この目隠しも、取ってあげなきゃねえ」

「駄目駄目！ このままにしておいて！」

そう言う智美は、やけに焦っていた。

「どうしてよ。変な娘だねえ。痛いでしょうに、こんな目隠し……。あいつはもう、行っちゃったんだし……」

「洋子さん。あなたの顔は見ないことにしたいの」

智美が真面目な語り口だったので、洋子は何か、思惑があるのだな、と感じながら……。

「どうせ私はトシマ……。そうか。私の顔を見たら、あなたの命が危ない？」

「ムリノさんには出来ませんよね、そんなこと」と、智美は確信をこめて言い、そして、続けた。

「そうじゃなくて、私が洋子さんやこのお店のことを深く知っていれば、後々、警察に訊かれた時、喋らなくてはならなくなっちゃうでしょう。そうなったら、隠し切れないうし、洋子さんに迷惑がかかるから」

目隠しされながらも、トツトツと喋る智美を見て、洋子は切なくなつた。そして、済まない気持ちで一杯であった。

「黒薔薇ちゃん……」

「私は洋子さんのその声で、充分です」

洋子は、目頭が湿りそうだった。

「弱いんだ、私、こういうの。あんた、あんまり私を揺さぶらないでよね」

智美は洋子とは異なり、あつけらかんとしていた。二十歳を過ぎたばかりの若者の特権。大胆さ、堂々とした態度。物怖じしない姿勢。そんな物すべてが、智美に備わっているように感じられ、洋子は羨ましかった。

「ムリノさんが帰って来た時に、洋子さんには、無事でいて欲しいの」

「こんなにひどい目にあつたのに……」

洋子は、負けた、と思つた。智美の若さに、負けた、と感じていた。

「洋子さんが一人なのは多分、ムリノさんが頭の中に、ずっといたからでしょう？」

智美の突然の指摘に、洋子は慌てた。

「じよ、じよ、じよ、冗談じゃないわよ、あんなやつ」

洋子には、そう言つて否定姿勢を示すのが、恥ずかしさを隠す、精一杯のパフォーマンスであつた。

「ムリノさんが帰って来る場所がちゃんとあつてね、それが、ちゃんと明るい方が、いいでしょう？」

「黒薔薇ちゃん、あんた、優しいのね」

育ちの違いだわと、洋子は目隠しの智美を見つめながら、心で呟いていた。私だって、もう少し豊かでゆとりのある日溜まりの人生だったなら、そのように柔らかな発想も可能になっていただろう……。でも……。そのように洋子は心に思った。

「そうだ。そうだったわ。私、ムリノさんに言っつて、無理に銀行口座の番号を紙に書いて貰ったんです。その辺にありませんか」

「あいつの、銀行口座を？ ……あった」

テーブル下に落ちていた、その紙切れは、誘拐プラン説明の為に用いた紙切れで、確かに新たな銀行口座が書かれていた。それは、ヤスネットモシビ銀行の「金田瀬商会」名義の口座だった。

「聞いておけば、ムリノさんが苦勞して、助けを求めて来た時に、すぐにお金を振り込めるでしょう」

「振り込むって言っても…」

簡単に言う智美に、そんなことしたら必ず捕まっちゃうよ、と、洋子は冷やかだった。

「心配ありませんよ。私が帰って、身代金の振り込みが中止になったとしても、事件とは直接関係のない、日本フゴウ銀行の三千万円を、ホトボリが冷めてから、私が、ヤスネットモシビに振り込んだじゃえばいいんだから」

「そんなことをしたら、あいつ、怠けがクセになっちゃうわ」

村野の性格を考えると、大金を手にして、さらにドロ沼にはまって行くという道程は、洋子の

考えては当然の帰結だった。

「それじゃあ、日本フゴウ銀行のお金は、洋子さんに、そっくりそのまま預けますよ。洋子さんの自由にしてください。勿論、洋子さんが使っても構いませんから」

「三千万、か」

三千万という金額に、さすがの洋子も考えた。店の運営に四苦八苦して、その日暮らしを続けている洋子。そんな洋子にとって、三千万という数字は、半端ではなかった。

「このお店も、良ければそのお金で、大きくして行ってください」

「渡りに船とは、このことね」

「渡りに、船？」

突然、洋子が豹変したような気がした。智美には、それまでの洋子が、おおらかな良い人、だったからだ。

「そうよ。渡りに船、よ。あんたが考えているほど、私はお人好しじゃないわよ。あいつの所に、お金を送る？ 冗談でしょ」

「洋子さん」

やけに、洋子の声が低く響いた。そして、そんな洋子の冷たい豹変に、智美はいささか失望した。ダメされたという気分だったのかも、知れない。

「あんたが いいのなら、私は自分の為に、使わせていただくわ、そのお金。ありがとう」

「そう、ですか……」

智美は智美で、自分の心の動揺を悟られまいと、冷静を装っていた。

「あなたの筋書き通りじゃなくて、悪いわね。だけど、世の中なんて、そんなものさ。綺麗事だけじゃ、やって行けないんだ」

洋子は、智美と過ごして来た間に、このまま、智美と親子のように、姉妹のように暮らせたらしいのにと、一時の夢を抱いた場面もあった。それが、家族や家庭の安寧を知らぬまま暮らして来て、そのまま世の隅に細々と生き続け、偶然に点灯したほんの小さな灯火の明るみ。……そこに芽生えた、淡い夢のカケラ、とでも言えようか。しかし、そんなつまらぬ、自分の希望の所為で、目の前にいる、若い将来のある娘を潰してはならない……。洋子は、心を鬼にしていた。

「悲しいだろ。でも、これが現実。人生なんだ。人間の本質なんだ。それでもあなた、私に、お金を預けるって言うのかい」

智美は、落ち着いて答えた。

「いいんです。あのお金、預けます。私が普段使ってるヤエザクラ銀行のキャッシュカード、渡しますから。私、帰ったら、日本フゴウ銀行のお金を、そのホトボリが冷めてから、ヤエザクラカードに移しますから、使ってください」

洋子には、智美の冷静な返答は、意外だった。

「変わった娘だよ、あなたも。自分の為に使えばいいものを」

「いりません。いらなわ、私に気を遣った、特別扱いの、あんなお金は、使えません」

育ちも境遇も学歴も全て自分とは異なるが、何処か似ている……。洋子は智美に、若い頃の自分をダブらせていた。

「昔は黒薔薇のあんたとおんなじだった。私にも、意地やプライドがあった」

「私と、おんなじ……」

「私の人生を自力で立派に作り上げようっていうプライドがね。だけど、今の私は自分が溺れな
いで済むようにって気分で精一杯。他人のことなんか、構っちゃられないんだ」

洋子は、そのように冷たく言い放った。

「そうなんですよね、洋子さん。私、まだまだ、自分の恵まれた境遇に甘えているのかもしれない
せんね」

洋子は反論せず、ただ、聞いて、いた。

その日の晩遅く、と言うか、深夜の寝静まった頃、突然、洋子の店の裏手から、車が勢いよく
エンジン音を響かせて、一目散に去って行った。村野が車を使う為に戻って来て、再び出立した
のに違いなかった。洋子は、村野の無計画性のなせる技だと呆れたが、よくよく考えると、その
行動にも意味があることが解った。新たに盗難車を調達して足が付くことを恐れた。警察や借金
取り等が、周辺で張っていないことを確認した。そして、車を残したままにして洋子や智美に迷
惑が掛かることを避けた。さらには、誰にも、新たな出発に対する邪魔を、されたくは、なかつ

た……。いずれにしても、村野裕行は、利山洋子等の前から、これで完全に姿を消してしまったのだった。

第四章 マル対の動向

会見会場は、大勢の記者達の不規則発言で、ザワついていた。銭山智美が利山洋子の店を離れ
てから、早くも、ちようど一週間が経過していた。

※

『犯人のことは、まったく知りません。目隠しの帽子とガムテープで、顔も見えなかつたし、解
りませんでした。何か、ジュースみたいな物を飲まされて、その後眠くなつて、時間がどれだけ
経つたのかも、よく知りませんでした。ほとんど眠っていたような気がして……。あんまり思い
出せないんです。すみません』

※

銭山智美のマイクを通した発言が、まるでカメラのシャッター音の合間をすり抜けるようにし
て、会見会場に響いた。はつきりとした様子いきさつを喋らない智美に、会場の報道陣は、一様
にジレていた。

智美は結局、洋子の店から村野裕行が消えた翌未明、速やかに店を後にした。風呂場で洗顔さ
せて貰い、洋子が用意してくれた、マスクとサングラスだけは、洋子の方を振り向かぬようにし

てすぐに着け、出来るだけ、壁や電信柱の町名表示も見ないようにして川沿いに歩き、偶然出くわした地下鉄の入り口階段を下り、駅名も頭に入れぬよう、そそくさと入って来た車両に、乗車した。そうして、摩王電鉄ではない、名前を聞いたこともないような私鉄の駅で下車した後、数十分、自力で遠く離れた横浜の倉庫脇の空き地まで歩き、そこで帽子やアイマスクやガムテープの残骸を手に持ち、古いベンチで横になっていたのである。つまり、横浜の倉庫街に着いたのは、偶然の結果論、だった。

利山洋子の付き添いも、最初から断った。自分一人なら、途中で警官から職務質問を受けても、放浪している状態だったとゴマかせるが、そばに洋子がいれば、どうしたって洋子が、容疑者になってしまうからだ。結果的には、横浜の倉庫脇でトラックの運転手に声を掛けられるまでは、他人との会話を通しての接触がなかったから、それは取り越し苦労だったのではあるが……。

智美は洋子と、店で別れた。智美は、自分も実は洋子と同じく、施設の出身なのだと、別れる際に敢えて初めて、事実を吐露した。洋子は自分は汚い女だと言った。自分のことで精一杯なんだとも、言った。でもそれは恐らく、黒薔薇女子大に通う銭山智美を意識しての発言に違いない……。智美は、そう感じていた。だから智美は敢えて、洋子に自分の過去をぶつけた。智美は、物心付かぬうちに、施設から、子供に恵まれなかった銭山家の養子に入って、何不自由なく育てられた。そして、小学生になり、その事実を知る。病院の跡取りを作るのなら男子を養子に

迎えればいいのにと、養父母を当初はいぶかったものの、それも、「縁」のなす技だったのだ。

そして時が経て、年が十五も離れた双子の妹弟が突然出来、そのいぶかりは、何時の間にか消え去って行つた。どうでもいいことに変わってしまったのだ。右腕の痛みはどうやら、施設での怪我が尾を引いているらしい。しかし、院長である父、すなわち養父は、検査では、原因は解らなかつたと智美に言い、脱臼しやすくなっている、とだけ付け加えた。また、そんなことも、智美は黒薔薇女子大に通う過程で、些細な事柄となり果て、殆ど、気にすることもなくなつて来ていた。

横浜の倉庫脇で、通報によりやって来た、近隣交番の警察官に職務質問を受けた際、智美がベッチに横になつていたうえ、ロープ跡が両手首に残つていたので、即座に救急車で直近の病院へ収容された。そして、そこでなされた警察の事情聴取も、最初は通り一遍であつた。それでもやはり、智美が予測していた通り、犯人の顔については同じ聴取が何度も繰り返された。しかし、顔を見ていないことが奏効して、智美が本当に容疑者の顔を知らないことが伝わった模様で、追及の手は、それ以上、さほど鋭く突き刺さることもなく、過ぎ去つて行つた。

智美は最後まで、犯人については、よくわからないと言い張つた。意地でも、洋子のことを告げ口してはならないと、何故か、洋子に対しての対抗意識のようなものを抱いていた。何故か解らないが、喋ることで、洋子の人生に負けてしまうような気になつていた。

一方、そんな智美の記者会見を、自宅兼店舗二階の居間で眺めていた利山洋子は、写真ではな

目隠しを取った智美の動く素顔にテレビで接し、意外に大人風だわ、と感じていた。そして、その鼻っ柱の強そうなマイク前での話しぶりに、自分の若い頃にそっくりじゃないかと、目を細めたりもしていた。智美は、テレビの中でも、右腕を時々、気にしている……。

洋子には、幻の娘がいた。娘の首が座らぬうちに、訳あって、知り合いに養子として手放した。断腸の思いに明け暮れる日々。結局、職を転々とし、酒乱で乱暴者の夫とは別れ、洋子は一人で生きることになった。一歳にも満たぬ赤ん坊に暴力を振るわれ、危うく死なすところだったのだ。それを、洋子が夫に包丁で必死に刃向かうことで、すんでのところで、ようやく防いだ。地獄の日々だったあの頃に比べれば、今は貧乏でも、明るい。あの娘は今、どうしているのか。智美との数日、村野との数日を過ごし、あの頃の記憶が蘇ったのであった。洋子は、一つにも満たぬ娘とは、それ以来一度も、会ってはいない……。

テレビの映像が、スタジオにいる、滑舌が利いた女性アナウンサーに切り替えられ、ニュース原稿の続きが読み上げられた。

※

『このように、警察に保護された銭山智美さんは、記者会見に臨んで元気に語りました。誘拐されて一週間余り。無事に人質の銭山さんが保護されて、一段落した今回の事件ですが、犯人はいまだに逃走中です』

※

その時点で、三人で過ごした奇妙な数日から数え、一週間が、あつと言う間に過ぎ去っていた。そして洋子の前から去って行ったあの誘拐男も、このニュースを何処かで眺めているのかしら、と、洋子は考えながら、テレビのチャンネルをリモコンで切り換えた。

一方で、そんな消え去り方をした、その男の方は、東京港フェリーターミナルの待合室で、大型スクリーンに映し出されているテレビのニュースに見入っていた。左手に持った、北海道行きの切符のカドで、鼻の頭を、ゴシゴシとかきながら……。

※

『犯罪心理学に詳しい班陣満教授によりますと、誘拐行為自体を投げ出して逃走している犯人は、何事にも飽きやすい性格で、逃走することにもそのうち飽きて、ひょっこりと顔を出す可能性があると、指摘しています』

※

そんな訳ないだろう、ふざけやがって、とスクリーン画面を見ながら、村野は、心の中でホザいていた。もうこれ以上やると、何も得られぬまま、お縄だけ頂戴してしまう。それだけは絶対に避けなくてはと、意を決して洋子の住処から飛び出して来た。今後の身の振り方は細かくきちんと設計してある訳ではなかったが、馬に乗っていたよしみで、北海道に渡って牧場の手伝いでも出来ればいいなど、何となくボンヤリと、綿菓子みたいな計画を抱いていた。その通りになるかどうかは、無茶と苦茶で塗り固められた今回の誘拐人質計画と同じで、最悪だと、オジャンと

なり、シャボン玉みたいに潰れてしまうのかも知れない。しかし、銭山総合病院や智美からの身代金をアテにしないで、とりあえず生活を立て直そうと考えた以上、次の行動へと速やかに入って行かなくてはならなかった。姿を隠せば、借金取りにも追われなくて済む。まさか、日本全国津々浦々まで、追手を寄越すこともあるまいと、全く計画性の無い楽観的なストーリーを、村野はただ、頭中に描いているだけであった。

※

『世間を騒がせ、身代金を取ろうともせず、人質を解放して逃走生活に入った犯人は一体何を考えているのか、専門家さえ、その真意をつかみかねている状態です…』

※

真意は村野の頭の中にあるだけで、実際、何故として、仕掛けられた誘拐人質事件なのか、評論家や有識者にもさっぱり解らないのだった。ただ単に世間を騒がせる為だけなら、金や時間を掛け過ぎているし、一歩間違えば、殺人事件にもなりかねない。金目当てであっても同じだ。それも身代金誘拐人質となれば、重罪に陥る可能性が高い。そこまで覚悟した上での犯行とは、いきさつなりゆきの稚拙さから見ても、常識的に到底考えられない……。関係者は、ただだ、頭をひねるばかりなのであった。

*

*

さらに一週間が経過して、人々がトボケた身代金誘拐事件を忘れかけた頃の、晴れたある日。

家電店の大型テレビも、ラーメン店のチューナーだけ新しい、古びたテレビも、車に取り付けられた小型のワンセグ液晶も、すべてが同じように同じ時間帯に、意外なニュースを流し始めた。各局、昼のニュース枠の中での速報だ。

※

『ミツゴのシロクマの赤ちゃんは、飼育係のサカリダさんに見守られ、スクスクと育っています……。少々、お待ちください』

※

アナウンサーが横からの指示に、やや慌てて、原稿を手元に寄せた。そして、息つく間もなく、そのニュースを慌ただしく読み始めた。

※

『ただいま、新しい情報が入りました。今日未明、室別市郊外の室別牧場の厩舎内で、干草の中に隠れていた男が馬に蹴られて重症を負い、室別市民病院に収容されました。この男は、病院関係者に、うわ言で、ムラノが無理な誘拐、カネアリ公園、黒薔薇小娘うるせえぞ、などと、世間を騒がせていた、女子大生身代金誘拐事件に関連のある言葉を、口走っている模様で、警察では、この男が回復するのを待つて、事件との関連がないかを、調べることにしています』

※

世間を騒がせた挙げ句に犯人が逃走して身元さえ解らないままという、一般人にとってみれば

消化不良になってしまふような事件の展開だっただけに、この情報を聞いた関係者は犯人検挙かと気色ばんだが、まだ事件そのものとの関連性は伝えられず、情報としては不満足な状況が続いている。

そんな当事者、村野裕行は、意識は回復したものの、頭を負傷しており、縫合手術の後、入院措置が採られた。痛み止めでの不安定な意識レベルの中、村野が最初に夢うつつで入り込んだ世界は、彼の華やかなりし競馬騎手の時代であった。競馬場で、若かりし頃の村野が、出走している馬のうちの一頭にまたがり、懸命にム子をくれて、ゴールを目指している。その表情は精悍で、現在の人質身代金誘拐犯、村野裕行とは、まるで別人だ。

村野の頭の中の想像世界の画が、自分が所属していた厩舎周辺に変わった。馬を見ながら担当の調教師と喋る村野の姿は、小柄だが映りが大きい。そんな遠く昔の自分の全盛期を頭の中に思い見ながら、病院ベッドに横たわって眠っている、不精髭も剃られツルツル顔の村野……。そんな村野裕行の目尻から、一筋の涙が耳元にこぼれ落ちた。

村野が夢の中で次に訪れたのは、洋子の店、新しい方の「スナック・洋子」だった。しかし、洋子の姿はなかなか見えない。誰か知らない女が、テーブルの前に座って、村野を見つめている。洋子は、その後方に座っているようだ。しきりに村野に向かって、前の女をよく見ろとせつっている。どういう意味なのかは解らないが、村野は言う通りにした。

※

『何時だって幸せは、周囲の人にあてがわれて作り出すものじゃあ、ないでしょう。自分の努力で生み出すものでしょう?』

※

洋子が指し示していた、目の前に座る女は、目隠しをしていない、銭山智美だった。村野は夢の中で、目隠しを外した智美に面と向かっていた。端正で女性としては彫りが深くテレビよりも大人っぽく見える、その表情。そんな智美が、切々と村野に説いているのだ。村野には、よく解らなかった。どうして智美と同じ場所にいる、どうして自分が智美に説教されているのか。どうして智美は目隠ししていないのか。どうして、どうして、という疑問詞ばかりが先行して、村野の心を苦しめていた。

「この、黒薔薇の、バカタレが」

村野はそう口走るなり、智美の前から遠ざかり、後退りして、そこに控えていた馬の背中に乗ろうとしていた。すると、その黒びかりして輝く、村野にはとても不釣合いに見える上等な馬が急に暴れ出し、とうとう、必死になって避けようと焦っていた村野を蹴り飛ばしてしまった……。

正気が飛んで行った。夢の中でも、村野は馬に蹴られて気絶していた。そんな姿を見ていた現実の村野は、夢中の自分の姿を眼にし、哀れで仕方がなかった。その上、滑稽で……。自然とベッドの枕が再び、横になって眠っている、現実の村野の涙で濡れ始めた。

実際の村野の救急搬送では、普段は静かで爽やかな、広々とした牧場の経営で成り立つ村中を、大騒ぎに陥れたのだった。夜更けは実にも静かで、風の音しか聞こえないような牧場脇の厩舎前に、赤色灯を落ち着きなく回転させる救急車両と、誘拐人質事件の犯人かも知れぬと急行して来た数台のパトカー。投降を促す為に用意されたのだろう、複数のハンドスピーカー。そして、警察無線の無機質な、複数の雑音声……。

※

『室別牧場より緊急搬送……。搬送者一名、意識不明。馬に蹴られた模様。四十歳前後、ジャンパー姿。一見、ヘンなおじさん風』

※

おじさん風、ではなく、ヘンなおじさんそのものだった。

緊急無線でそのように各移動へと照会された村野裕行は、速達便のようにして室別市民病院に送られ、入院させられた。入院と言っても、部屋の周囲を警官が完全監視する、言うなれば、隔離であった……。

*

*

競馬場。それも、漆黒迫る夕闇の中の競馬場は、カクテルライトに照らされて光る芝の緑が、まるでラメの入った敷物を見ているようで、やけに鮮やかで華やかだった。キラキラと不規則に反射するのは、芝の表面に下りた露のせいか、あるいは調整用に撒いた水道水の影響に違いなか

った。銭山智美は、誘拐人質事件の後遺症も癒え、黒薔薇女子大でのクラス一の親友で幼なじみでもある、鹿野美穂とともにナイター競馬を見にやって来ていた。場内に入って行く多数の競馬ファンの流れの中に、銭山智美と、その女友達も交じっていた。智美には身辺警護が二人、念のために遠まきに同行している。初めは、行く先が競馬場だと告げられた担当警察官は、マル対は一体何を考えているんだと閉口していたが、主治医が積極的に外出した方が良いと助け船を出しているせいで、警察官達も、皮肉っぽく自粛を促す、口うるさい監督者になるまでには、至っていないかった。

「智美って、ギャンブルにまで、手を出してんの？」

親友の鹿野美穂は、智美の変わっている所は好きだったが、まさか、競馬にまで手を出しているとは思わなかったようだ。

「たまには買うわよ、馬券だって」

「信じられない」

「馬券で、勝馬投票券っていうんだよ、ホントは」

「へえ。知らなかった。それで、今日もやるの、その勝馬投票券？ 外れるだけだよ」

美穂は正直、競馬、ギャンブル、というイメージからは、遠ざかりたかった。

「いいからいいから、早く行こうよ」

「智美。何か、ハラマキオジンみたいだよ」

ハラマキオジンと美穂が言うのを聞いて、智美は、カチンと来た。

「競馬、一度も見たことがなくせに。百聞は一見にしかず、よ。さあ、行こう」

大学にいる大抵の女の子が、体裁だけを気にして、新しいことに挑戦しようとする。そんな中で、目の前にいる美穂は、まだマシな方だと、智美は位置づけていた。これは、美穂が、幼幼稚園時代から智美に接して、智美の影響を受けて来たせいでもある。智美は、あまり気乗りしない様子の鹿野美穂を促して、どんどんグングン、ゲートに向かって進んで行った。そして……。

「ねえねえ。小バラが空かない？ カフェメシでもあればいいのにね」

智美がするように誘って、美穂の方が、お腹一杯だからと断ったタメシがなかった。

「そうだね、いささか空いてる、かな」

「何か、食べながら、見ようよ」

「いいね、いいね」

やや小柄で細身の銭山智美と、体育会系で大柄な鹿野美穂。しかし、この際、ダイエツトだからなどとシャレてはいられなかった。何分、通路両脇に並ぶ出店から、空腹感を沸き立たせる心地よい香りが漂って来る。そんな中、確かにカフェとまでは行かないが、ノボリを立てた店が、ズラッと並んでおり、その中でも特に目立つノボリを、鹿野美穂の方が先に見つけた。

「あそこ。サルカニ印の、オニギリ」

そこにはサルとカニとオニギリをあしらったイラストと、平仮名で「さるかに」と白抜きの毛筆で書いてある、藍色の目立つノボリが、立っていた。智美は、すぐにそれを見つけた。

「うん。あれね。おいしそうじゃない」

そう言つて二人は、その店に近づいて行つた。智美は、そのノボリを何故か何処かで、見たことがあるような気になつていた。もしかしたら、夢の中で見たことがある光景なのかも知れないわ……。そんなことを智美は心の中で反芻していた。

オニギリ屋では、中年の女性一人と、アルバイトらしきジャンパー姿の青年が一人、家内工業みたいに販売していた。

「オニギリセット、二つください」

智美に続いて、美穂も呼応した。

「それに、麦茶もね、二つ」

何故かそんな状況を見つづ、やや遠まきに距離をとつた警護の警察官が、小声で呟いている。

「現在、オニギリ、購入中。サルカニ印」

きつと、襟にでも付いている小型マイクで交信しているに違いなかった。でもどうして、サルカニ印とか、オニギリまで伝えなくちゃならないのか、智美には解らなかつた。

「まいど、どうもね」

そう言つて、品物を包み始めた、サルカニの中年女性は、智美の顔を見て、表情を引き締め

た。心臓がバクバクと鼓動の振幅を拡げるのを、その女性は、何とか平静を保って見破られぬように、震える手を早めた。その女こそ、何を隠そう、あの「スナック洋子」で智美がしばらく一緒に寝泊まりした、利山洋子なのであった。当時、ずっと目隠しをされていた智美は、目の前にいるサルカニの中年女が、まさかあの、利山洋子だとは、気づく由もない。洋子の方も、自分の顔を見ていない智美が気づくはずがない、と、自分に言い聞かせ、平静を装う。

「早くしてよ、オバさん」

鹿野美穂の催促に、利山洋子は我に帰った。そして、結局、素性を隠し通す決心をした。御対面番組みたいに素性を明かして当時を懐かしむのもいいかしらと、チラと脳裏を甘い感情が過つたが、洋子はそれを結局、躊躇した。捕まるかも知れない、などという理由からでは、なかつた。一生懸命に生きて行こうと誓った自分の心が緩んでしまいそうだったからだ。結果的には、その選択が、洋子自身を逮捕劇から救ったことになる。もしも素性を智美に話し出したら、状況を察した警護の警察官に事情聴取され、さらに任意同行を求められたかも知れない。その時の利山洋子の選択は、偶然の綱渡りだった。

「友達と二人で競馬の観戦かい？」

智美は、洋子の言葉に、素直に呼応した。

「ええ。いいでしょう。親友同士で競馬場」

「そうだよねえ。競馬もいいモンだよねえ」

脇で見ていた鹿野美穂は、サルカニの女がわざと包みを手直しして、まるで時間稼ぎしているみたいな動作を挟んだのを、見逃してはいなかった。

「ねえねえ。早くしてよ、オバサン。いくらですか？」

オバサン、オバサンという響きが、利山洋子の方には「トシマのヨウコ」を連想させ、シヤクに触った。

「別々にしてくださいね」

「はいよ、解ったからさ」

小袋二つに分けられた商品が、漸く、出来上がった。洋子は、これで永遠に智美とは会うこともないだろうと思うと、何故だか、名残惜しく、今にも素性を吐露しそうな心境ではあった。

「は、はいよ。三百五十円ずつ」

そう言つて、洋子は、思い立ったように

「……ちよ、ちよと待つて」

智美も美穂も、洋子のせわしいその声に、キョトンとした眼差しを送った。

「これさ……」

そう言うと洋子は、二人に渡すはずだった白いビニール袋にそれぞれ、サンドイッチを一つずつねじ込むようにして入れた。

「あの……。頼んでないわ」

美穂がそう言うと、智美も横から同意して頷いた。横にいて雑用をしていたアルバイトの青年も、いぶかしげな表情を向けた。そして、それらを見越していたかのように、洋子が二人に応じた。

「売れ残りだからいいのよ」

そしてさらに、アルバイト青年にも、残っていたサンドイッチを押しつけるようにして渡した。

「さあこれで、店仕舞いだ。また、おいでね。私、木曜の晩に、ここに来てんだ。今度、また、競馬がある木曜日になさ、二人して、おいで」

突然のプレゼントに巡り会ったようで、智美も美穂も、得した気分が、徐々に心に沸き上がって来た。美穂が智美の顔を横から眺め、智美も満更ではないと確信して……。

「ありがとう、オバさん」

「また、サービスしたげるよ」

智美も袋を受け取りながら……。

「オバさん、ありがとう。また、来るわ」

「こちらこそありがとうね、いろいろと……」

そんな会話のやりとりが済んで、智美と美穂は、サルカニから離れて行った。しかしそんな中、智美には何処か、引っかかる物があつた。ノドに小骨が刺さつて抜けない時に、ご飯を呑み込むような心境であつた。

「いろいろと……」

独言を口走る智美はやや、首をかしげながら歩いている。その一方で美穂はすでに、おにぎり
を袋から取り出して、今にも食べ出しそうな様相だ。その時だった。そんな状況にもかかわら
ず、智美が突然立ち止まったものだから、美穂は歩きながら食べようという目論見を捨てて、智
美に合わせ、真横に立ち止まった。

「どうしたのよ、智美」

「さっきの、オニギリのオバさん。何で『いろいろと……』とか、『ありがとね』なんて、言っ
たんだろ」

「智美い。どうでもいいじゃないか、そんなの」

智美は、オニギリの包みに視線を落としていた。何か疑問を拭い去る為のヒントが、その中に
隠れてはいないだろうか……。包みの中を開いて見る、智美。訳も解らず、同じ動作をジェス
チャーのように繰り返す、美穂。袋の中には、品物と一緒に紙ナプキンが数枚入っており、サ
ルカ二印と、その右下に、小さく、「ようこ」という屋号が、印刷されていた。智美は、それを
発見してハッとした。

「あのオバサンの声……」

目隠して過ごした数日間聞いていた、洋子の声が湧き出して、智美の脳裏を再びかすめた。

※

『せっかくの木曜日は何よ。定休日の大切な晩なんだよ』

※

同じ声に違いないと、智美はさっきの、サルカニの女の声を今度は思い出して比較していた。

「智美、智美」

自分の世界にはまっていた智美を、美穂の呼びかけ声が引つ張り出して、智美は、我に帰った。

「木曜日は、スナックが休みなんだわ」

「話がピーマンで、わかんないよ、智美」

「何でもない、何でもない。あの人真正銘、自分で自力で頑張っているんだわ」

「何、言ってるのよ？」

「悪ぶっちゃって、洋子さんたら」

そう、智美は小さく呟いた。

「何？ 今、何て言った？」

歩き始める二人。智美の脳裏に再び、洋子の声が響いていた。

※

『私の人生を、自力で立派に作り上げようっていうプライドがね……』

※

智美は、「サルカニ」まで戻ろうかと、一瞬考えた。しかしその先どうなるのだろう、と考

え、自重して、そのままスタンドに歩を進めたのだった。

階段を上りきり、視界が拡がると、満天の星空の下、カクテル光線が眩しいほどにきらめき、それが芝のグリーンで反射して、観客の気持ちをいやが上にも高揚させる。そんな心地良さに酔いしれ、常連のナイター競馬客は、さらに足繁く、パドックや観客席に通うようになり行くのだ。銭山智美もまた、常連の域に達していないとは言え、ナイター競馬のカクテル光線のトリコになつてしまつた一人である。

「ねえねえ。何処が、ハラマキオジンみたいなのよ。……つたく、こんな奇麗な芝の世界を眼前にしてさあ」

「こんなに奇麗だとは、知らなかつたんだもの。ちよつと、いささか、訂正ね」

そんな会話の間隙を縫つて、出走馬が直線コースになだれこんで来た。懸命に競走馬の背中で、鞭をしなせながら、ゴールを駆け抜ける騎手達。そんな刺激的な光景を眺めつつ、智美は、村野裕行を背中に乗せた競争馬が馬群の中にいて、ゴールを指して疾走する勇姿を、幻に見ていた。

「蹴られても蹴飛ばされても頑張れよ」

思わず、智美が大声で、馬群の中の見えない村野を応援した。

そんな声援が聞こえ届く由もない。が、時を同じくして、北は北海道の室別牧場で、馬に蹴られて怪我をした村野裕行はというと、室別市民病院の一病室で包帯にくるまれたミイラ男のよう

な姿を横たえ、浅い夢にまどろんでいた。無意識に、負傷した足に痛みが走らぬよう、やや左を下に気持ち横寝をする形で、誘われるように小さく身体を動かし始める。夢の世界だ。まるで、馬の背にまたがっているような格好をして、横たわったまま、疾走する馬群の中で、身体を上下動させているのだ。

笑みがこぼれた。ゴールしてから、観衆の声援に応えている自分自身を、夢の中で味わっているに違いない。

一方、同時刻のナイター競馬場の智美には、輝く村野の幻の勇姿が、確かに見えている。

「ゴールは、何処にも逃げないからね」

鹿野美穂は、叫び続ける智美を、不思議そうな表情で眺めている。

「ゴールが逃げないなんて、智美、そんなこと、当たり前じゃないか」

美穂に何と言われようと、智美はお構いなしに、大きく叫び続けた。

「皆、頑張ってるんだよ。自分の人生を」

「まるで、誰かを論してるみたい」

「いいの。これで、いいの」

「ついて、いけないよ、智美には」

そう言いながらも、智美に笑顔を見せ、美穂もまた、応援をし始めた。そして、それに負けじと声を張り上げる、智美。何とか村野に立ち直って貰いたいと、何故か、誘拐されて目隠しのま

ま、針のムシロの数日を過ごした智美の方が、心の何処かで村野を支えようと考えている。だって、ムリノさんには、待っている人がいるんだからね。だから、必ず、立ち直って、戻って来てね。洋子さんだって、きつときつと、同じように感じていると、思うから……。

そんなことを胸の内でも考えつつ声援を送っている智美と、美穂。そんな二人の後方十メートルほどのコンクリート柱の陰に、女性が一人、口を押さえながら見守っている。サルカニのオニギリ屋の店仕舞いをアルバイトの青年に任せて、二人をつけて来た、利山洋子だった。

洋子は、智美が右手を気にしているのを認めてからずっと、ひよっとしてもしかしたら、と、気が落ち着かなかった。二十年ほど前、洋子が図らずも手放した、当時一歳に満たぬ娘は、今では恐らく施設の紹介により、一般の家庭で養子として育てられている筈だ。しかし、その家庭が、何処のどういう家庭なのかは、まったく解らない。調べようとしない、会おうとしない、というのが、約束だったからだ。だからもしかしたら、最初の施設が、その後、別の施設に預け移した、ということもあるかも知れない。私の娘は、あの時、夫の暴力の巻き添えで怪我してしまった。洋子は擦り傷だと思つて、娘の右腕に包帯を巻いただけだったが、収容先の病院では、さらに治療が施された。その治療内容までを確認することは、洋子には許されなかった。何故なら、洋子はすぐに、所轄の警察に、夫への傷害容疑で確保されてしまったから。でも、もしかしてあれが、脱臼だったとしたら……。あの時確かに、娘の泣き方は、何時にも増して、激しかった……。

銭山智美に直接聞いて、智美が何処の施設の出身かを割り出せば、様々な事柄が明らかになるのかも、知れない。しかし、万が一、私の娘が、目の前の、目の前の、この娘だったとしたら……。黙っておこう。私が血縁者ということになって明るみに出たとしても、あの娘には何の得にもなりやしない……。

洋子は、そう思い、心に蓋をして、そつと智美の後ろ姿を追い続けようと決めたのだ。

そうやって智美が競走馬を応援する姿に接し、やはり智美は、私と同様に、村野のこれからを応援しているんだわと、洋子は確信していた。変わっている娘。でも、何処か、憎めない、優しい娘。私も、頑張って仕事しながら、待つてみようかしら。待つてみようかしら……。そんな洋子が、とうとう涙眼となり、その雫を拭うこともせず、智美と美穂をいつまでも、いつまでも、見守っていた。

*

*

第五章 想定外の成りゆき〱年を経て

銭山法律事務所には、雇われ弁護士は皆無である。代表であり責任者である、弁護士、銭山智美が、民事事件を中心に、案件を請け負っている。都心の一等地ではない、東京都下の三多摩だとは言うものの、表札は、「銭山法律事務所」。智美が一国の主だ。実家からの借入金は、毎月少しづつではあるが、確実に減少している。銭山総合病院は、十五歳年下の弟が将来引き継ぐことで、智美には負担がなくなった。それも手伝って、智美は結局、黒薔薇女子大の文学部から法学部に移籍した後、法学研究所に残り、大学院生として法律を学び、その延長線上にある司法試験に、三度目で合格。法律家への道を開拓した。この道を選んだのは、やはり身代金人質誘拐事件に遭遇したことによる部分が大きい。事件の最中、村野裕行や利山洋子に勉強しろ勉強しろと、さんざんナジられたのが響いたのだ。事件中に、人質が犯人に諭されるなんて、お話にもならないわと、一発奮起して勉強したのだった。

「智美お嬢さん、新参のお仕事です」

アシスタントが、デスクの智美にゆとりがあるなど認めた途端、すかさずそうやって、言葉を投げかけて来るのだ。

「もう、私ばかり、仕事案件の嵐。早く司法試験に合格してくださいよ。そうじゃなきゃ、も

う、やってらんない」

智美が、そう言つて駄々をコネると……。

「おふざけじゃあ、ありませんよ。智美お嬢さん。そんなに無理ばかり言う……」

そう言いながら、アシスタントは、何と、ペーパーナイフを筆立てから抜き出し、智美の頬をペンペンと叩いた。

「確かに、司法試験の方は停滞しておりやすが……。あんた、フトン蒸しの後、天井から吊るされて、ムチ打ちの刑つてのは、嫌なんだろ。ええ！ どうなんだい」

鋭くドスの利いた語り口に、智美は震え上がった。

「スゴミが増して、十年前のキャラクターとは、だいぶ変わって来ましたねえ」

十年前は、「ウルセエ」とか、「テメエ」とか、言つてただけだったが、何故かスゴミが格段と、増して来ているのだ。

「アッシがお勤めさせていただいた、堀の中での数年間。手前の周囲には、そのスジの方面の方々が大勢、いらつしやったモンですからねえ」

「ムリノさん」

「あつしは、ムリノじゃねえ、つて。お嬢さん。あんた、いまだに、お解りじゃないようですねえ」

響く低音でそう言うと、村野裕行は、ハスからギロツと智美を睨み付けた。そして、それを見

た智美は、思わず自分の口を掌で押さえてしまった。

村野には、利山洋子の店を複数回破壊するなど、威力業務妨害や恐喝罪という、いわゆる「マエ」があつた為、誘拐事件についても、酌量なく実刑に処せられた。そしてその間を、模範囚で過ごしてきた。その際、以前接したことのある六法全書を読破して、法律で生きて行こうと再決意したのだつた。一方、智美は、弁護士資格を取得して事務所を開設しようとした矢先、村野の「あの元人気有力騎手が、模範囚で出所間近！」という週刊誌の記事を見て、村野裕行に接見。村野が自分の借金処理の問題もあり、法律の勉強をずっと続けていた、ということを知り、銭山智美が後見人になつたのであつた。そして、トラブルは皆無のうちに、借金処理問題の方は、解決した……。

「解りましたから、ムリ……。村野さん。とにかく、村野さんがいてくれると、安心して仕事出来るし。お互いに、頑張りましょ」

確かに、その通りだつた。村野がいると、冷やかしの依頼客や、押し売りまがいのセールスマンが、一目散に退散して行くのである。そういう点では、村野裕行は、すでに貴重な戦力になつてゐるのだ。

「あつしはねえ、お嬢さん。あんたの尻拭いの為に、ここにいる訳じゃあ、ないんですからねえ。あつしは、この国を少しでも良くしよう……」

また始まつたと、智美は、腹の中で舌を出しながら聞いていた。どうしてこんなに真面目な男

が、現役女子大生身代金誘拐人質に走ってしまったのか、今もって智美には解らなかつた。がしかし、村野が絶対に再犯に及ばないという自信は、智美の胸中には、確実に根付いていた。

「ところで、洋子さんとは、音信はなかつたんですか？ ……塀の中では」

再びギロツと村野に睨まれ、智美は再度、口を押さえた。

その後、智美は、木曜日の競馬場に足を運んだものの、二度と利山洋子に接することは、出来なかつた。また、ムリノ、いや、村野から聞き出した洋子の店の場所も、持ち主が変わっていた。本気で探そうと思えば、恐らく見つけ出せるだろう。しかし、洋子を見つけたとして、何をどのように切り出し、喋ったら良いのか、智美には解らなかつた。

「智美お嬢さん。洋子は、必ず、何処かで生きていやすよ。だから、今は、そっとしておいた方がいい」

「私、もしかしたら、洋子さんの……」

すべてを知っているかのように、村野が智美の話を塞き止めた。

「それを言つて、どうなさるんですか。右腕の話も聞きやした。洋子を探し出してDNAをやれば、あつと言う間に事実が解りやす。真実が明るみに出て来るつてヤツでさあ」

そう言つて村野は、シマツタと一瞬、口を真一文字に閉じた。幼い娘が夫婦喧嘩の巻き添えを喰つて、右腕を怪我したという内容は、村野だけが洋子から聞いている話で、智美は洋子の手放した娘の怪我の一件は、全く知らない筈なのだ。

しかしどうやら、智美は深く追求しては来ない模様である。いや、智美はあえて、深入りして来なかった、という方が、正しいのかも知れない。

「もしもお嬢さんが、連絡をつけることを望んでいらつしやるのであれば、あつしも命がけで、洋子の行き先を調査いたしやしよう」

それを聞いて、智美はやはり、首を縦には振らなかった。その姿を見て、やはりこのまましばらく、やはりこのままがいいのでは、と村野は勝手に考えを深めた。洋子にも、智美にも、それが一番良い方法だと感じられたからである。

「私、今でも、洋子さんとは心の中でお喋り出来るんです。だから、無理に会おうとしない方がいいのかも知れないわね」

そう言う智美のデスクに、村野が資料の束を、ドスンと置いた。智美に頼まれていた、依頼事案に関連した資料の収集が済んだのだ。「アリガト、ムリ……、村野さん」

「智美お嬢さん」

再び、ドスの利いた、低音が、室内に響いた。

「なな、何ですか」

「ムラノが難しいようなら、ムリノと発音なさっても、手前は全く、構いませんよ、智美お嬢さん」

普段、禁酒禁煙の果てに笑顔もあまり見せなくなった村野が、少し笑った。そんな村野裕行を

見て、智美はまた再び、「ムリノさん」と呼べることに、幸せを感じていた。

一方、村野は村野で、利山洋子が場所を変えた後、関東近県で、割烹料理店、五店舗の経営者となり成功をおさめているということ、今の智美には口止めしておこうと、勝手に判断していた。各料理店の昼前の開店に併せて、会社員向けの弁当を店頭で売り出したところ、それが大当たりしたらしい。そして、結局利用させて貰った、日本フゴウ銀行、ヤエザクラ銀行経由の三千万円は、必ずノシつけて返すからと、利山洋子は何度か、堀の中の村野裕行への面会に来た際、話していた。実際、三千万円以上の額面が、ヤスネットモシビ銀行の村野の口座にキックバックされており、その通帳を、出所した村野は確認していた。村野はいざという時に、その通帳の金を、昔の三千万円について何も追求して来ない智美に、日本フゴウ銀行経由で変換しようと思っている。そしてさらに……。

銭山智美の毛髪、利山洋子の毛髪と同時に、村野裕行自身の毛髪もDNA鑑定依頼しているところだ、という事実。どんな結果が出ようとも、この事実も智美には話さず、自分の胸の内だけに仕舞っておこうと、心に決めていた。

あとがき

人生には、浮沈とかきつけかけが付き物です。良い時もあれば悪い時もあるのは、世のならわしでしょう。良い時に如何に自重して枯渴せぬように力を保つか。また、悪い時に腐らず、如何にして充電し力を貯えて必要時に備えるか。それを心して生きて行けば、何とか良い人生になるのではないのでしょうか。主人公は、競馬騎手として一世を風靡したにもかかわらず、その後の不遇で現役女子大生人質誘拐事件を引き起こしてしまいます。しかしながら、周囲の人々の協力や叱咤激励を糧に立ち直って、一からやり直す状況にまで、復活することが出来ました。それは、本人にとっては想定外の事柄であるのかも知れませんが、そういう顛末が目の前に現れる素地は、きつと本人の中にあつたに違いありません。それは、『もう一度やり直そう』と、意識して生きたことの証なのではないか？ やり直す、あるいはやり直そうと努力することは、決して無駄な徒労になることはないのではと、考えます。価値観は人それぞれですが、自分が自分を奮い立たせることの出来る何かを発見して、そこを踏台に再び邁進して行こうと考える。これが大切なことなのだと思います。特に過去に輝かしい栄光を掴んだことのある方々は、それで満足することなく、それに押しつぶされることなく、それ以上の輝かしい人生を、これから先、『新たに』作り出そうと、明るく頑張っていただきたいと思います。かく言う私個人も、笑いを真面目に追究

する、というテーマを心に、これからもずっと、書いて行きたいと思います。取材に応じていただいた皆様方。出版時に相談、協力に応じていただいたeブックランド社 編集の横山三四郎様、藤宮弥生様他皆様方。当作品を読んでくださる皆様方に深謝いたします。

平成二十五年春

倉田周平



想定外の成りゆき

～時を経てからの、それぞれ～

倉田 周平

発行 2013年 1月 10日

発行者 横山三四郎

出版社 eブックランド社

東京都杉並区久我山 4-3-2 〒 168-0082

電話番号 03-5930-5663

ファクス 03-3333-1384

<http://www.e-bookland.net/>

本電子書籍は、購入者個人の閲覧の目的のためのみ、ファイルのダウンロードが許諾されています。複製・転送・譲渡は、禁止します。
